

# 新・日本列島から 日本人が消える日

ミナミアシュタール®

## 最終巻

現代からの未来予測  
新しい世界へ移行せよ

新・日本列島から日本人が消える日 最終巻

ミナミアシュタール®



9784910000060



1920095018003

ISBN978-4-910000-06-0  
C0095 ¥1800E

破・常識屋出版

定価 1980 円

(本体 1800 円 + 税10%)

あなたが  
幸せを手に入れるための  
破・常識な歴史が、  
今解き明かされる！

# 目次

|     |             |     |
|-----|-------------|-----|
| 序の章 | 現代社会の闇      | 005 |
| 破の章 | ある惑星の話      | 095 |
| 急の章 | 新しい世界へ移行せよ！ | 215 |
| 急の章 | 新しい世界へ移行せよ！ | 271 |
|     | 後編          |     |

本日・本日  
本日・本日  
本日・本日  
本日・本日

序の章

現代社会の闇

朝8時、何気なく覗いたパソコンのニュースには、横浜駅の様子が映し出されていた。横浜駅の構内は、人で溢れかえり身動きもできないくらいの状況になっている。

「え？ どうした？ 何が起きた？」とニュースを改めて読んでみると、

「停電による電車の遅延？ 三時間くらい動かないってか？ こりゃ大変だわ。これ、みんなどうするんだろう？ この状況じゃ前にも後ろにも動けないでしょ」

画面に映し出される人々の表情はいら立ち、焦りがありありと見て取れる。会社に遅れる、学校に遅れる、取引先にどうやって連絡すればいい？ どうしよう？ という言葉があちこちから聞こえてきそうだった。中には堂々と遅刻できるとちよつと喜んでいる高校生の顔も見える。

「そうだよな、電車が動かないんだから遅刻しても怒られない、英語の授業さぼれる、ラッキー」  
って思っているであろう素直なその子の表情に、ちよつと笑ってしまった。



「でも、俺いつも思うんだよ、さくやさん」  
「何を？」

「この人たちってさ、一人ひとり違う生活、人生があるんだよね」  
「そりゃそうよ」

「このロマンスグレーの男性は、きつとどこかの会社の偉い人かな、偉いって言っても電車で通っているくらいだから、お抱え運転手がつく役員クラスじゃないよね、中間管理職的な？ 中学生か高校生くらいの子どもが二人いて、奥さんと四人で暮らしている感じ。頑張ってる感じが、マンションを買ってローンを返している最中ってとこかな？ でもなんか不機嫌そうな顔だねえ、子どもが反抗的で手を焼いている。そのことで奥さんと今朝ちよつとした言い争いでもしたかな？ この若いお兄ちゃんは、何か携帯を見てニヤニヤしているけど、この人ごみの中でよく携帯を触れるね。その表情を見ると会社に連絡している風でもない、きつと恋人と、電車止まって大変だよ、みたいな甘えたやり取りしてるんじゃない？ で、この若いOL風の女性は・・・」

「よくそこまで自分勝手に妄想を膨らませられるわね」

「こうやって妄想していると一人ひとりの人生が見えてくるじゃない？ それって面白いよね。一人ひとりどんな生き方をしているんだろうって妄想していると、その人たちをリアルに感じることができるから面白いんだよ」

「そうね、一人ひとりにそれぞれの人生があるわよね」

「でもさ、それもまた不思議なんだけど、みんな同じに見えるんだよ。一人ひとりそれぞれだと思っていてのに、ふと見るとみんな同じに見える、ただの人の塊にしか見えないときがあるんだよね。特に朝の出勤時間帯に大きなマンションから一斉に人が出てくるのを見ると、すごく不思議な感覚に陥るときがある。みんな同じような色の服を着て、同じような色のカバン持って、同じような表情をしてる。今みんなマスクしていて、表情さえ見えないから誰が誰かも分からない、知り合いに会っても分からないんじゃないかな？」

「没個性の社会だからね」

「没個性ねえ、でも、いくら没個性って言っても、人それぞれ生き方は違うよね」

「みんなが同じ生活をしているわけじゃないのに」

「そうね、それぞれ違う生活はしているわ。でもね、価値観が没個性なのよ」

「どういうこと？」

「価値観がほとんど同じだから、それぞれ違う生活をしていると言っても、ほとんど同じ生活になっている。さっきも言っていたけど、ロマンスグレーの男性は家族がいて、子どもは二人くらいで、マンションをローンで買って、その返済をするために会社で働いているっていう価値観。あの人たちの中で、どのくらいの人と同じような生活をしているかしらね」

「そう言われれば確かにそうかも。あの若いお兄ちゃんもきつと恋人と結婚して、できれば郊外にでも大きめの戸建てを買って、そこで子どもを育てるっていう夢を見ているような感じがする。」

これは俺の勝手な妄想だけど(笑)」

「でも、社会自体がそれを望んでいるでしょ。年頃になったら早く結婚しなさいっていう圧力がかかってくる。そして、結婚したら子どもは？ って聞かれる。子どもを産み育てるのが当たり前のように言われるでしょ。そして、子どもができたらできたで、今度は家を買うの？ 家を買った方が子どもにもいいし、社会的にも信用を得ることができるわよって言われる。

その声を聞いているうちに、それがどんどん刷り込まれていくわよね。そして、いい人と結婚して子どもを産み育てて、家も買うのが幸せなことだと、それが自分の幸せだと思い込んでしまう。そして、それが夢であり、その夢を追い求めることが生きるための目的となってしまうの。子どものときからその夢を刷り込まれてしまっているの」

「いや、子どもにはそこまで言わないでしょ」

「一生懸命勉強して、いい学校に入りなさい、って言っているよね？ それはどうして？」

「そっか、確かにそうだ。いい学校に入って、大きな一流会社に就職したり、医者や弁護士みたいな社会的に地位のある資格を取れば、人生は勝ち組的な教育しているわ」

「それも同じ価値観を刷り込んでいるからよね。自分の好きなことをして、自分の好きな人生を生きなさいなんて教えてはくれない。小さな頃からいい学校、少しでも沢山稼ぐことができて、社会的にも羨ましがられるような仕事につけることが最良の道だと刷り込まれていく。そして、気がついたらみんなと同じ価値観、同じ生活、人生を目指している。服もカバンも同じような色、没個性

だけど、生き方も没個性になっているの。だから、人それぞれの生活がある、人生があるって言うても似たような感じだから、人が沢山いる個人ではなく、人の塊という感覚がするってことよ」

「没個性の幸せかあ……みんなが幸せって呼んでいるのは幸せじゃないってこと？」

「それを幸せだと思つたら幸せなんだろうけど。でも、自分で決めた幸せじゃないってことは確かだね。小さな頃からこれが人生の幸せなのよって親や周りの価値観を押し付けられ、その親を喜ばせるため、安心させるため、親も自分も他人に羨ましいと思わせるために生きることを目的としてしまっている。そして、それができれば勝ち組として認められ、できなければ負け組として肩身の狭い思いをして生きる。その目的さえ目指さない人は、負け組どころか落ちこぼれとして見られるから何としてもそれは避けたい。みんな本当は自分が何をしたいのかなど考えることもなく、ただ刷り込まれた幸せを目標に生きることになる。だから没個性な人しかない社会になるってこと」

「それってなんで？ それを幸せだと考えるようになったのはいつから？ どういう経緯でそんな価値観になっているの？」

「これはまた歴史的な話になってくるけど、そういう価値観を持たせたいと思っている人たちがいるってことよ」

「没個性にしておいた方が、いいって思う人がいるってこと？」

「そういうことね。みんなが同じ価値観を持って、それを目的として生きてくれたら楽に支配することが出来るから」

「支配ねえ、いつもさくやさんは支配されているって言うけど、支配されているって言われても、どうも現実感がないんだよね。そりゃ昔の奴隷のように手かせ足かせをされて働かされているならまだしも、俺たちは自由だし、仕事も自由に選べるし、誰かに支配されているっていう実感が無いんだよね」

「それこそがもう支配されている証拠なのよ。あなたは自由だと思ってるけど、思考、考えがもうすでに自由じゃないってこと。さっきの話じゃないけど、人生の目的さえ操作されているでしょ。何が自分にとって幸せかということさえ考えることができなくなってるっていうのは、もう支配されているってことなの。いい？ 支配者たちがどうしていい会社に就職すること、いい人と結婚すること、優秀な子どもを育てること、いい家を買うこと、沢山稼ぐことをあなたたちの人生の目的にしている分かる？」

「どうしてだろう？」

「あなたたちを縛るためよ。昔の奴隷制度と同じように、あなたたちを縛るため。今は目に見えて手かせ足かせをしたりすることはしないけど、思考を操作することであなたたちから自由を奪い縛り付けているの。結婚して家を建てるということは、生活に縛られるってことでしょ」

「でも、好きな人と結婚したいし、その人と暮らすために快適な家が欲しいって思うのは自然だし、縛られているわけじゃないと思うけど……」

「じゃ、たとえばローンのことを考えてみて」

「ローン？」

「そう、家を買うのにほとんどの人は銀行からお金を借りて買うでしょ。ローンって借金よね。言葉は柔らかく聞こえるけど、借金よね」

「そうだね、でも、家を買うくらいのお金はお金には出せないよ。だからって家を買えるくらいのお金を貯めようと思ったら、いつになるか分からない。もしかしたらずっと買えないかもしれない。なら、銀行から借りて家を買って住みながら返していった方が、合理的だと思うけど。賃貸に住んでいたなら、その賃貸料を払いながらお金も貯めなきゃいけないことになるでしょ。それから賃貸料だと思えば、自分の家に住みながら返せるんだからそっちの方がいいと思うけど」

「それがもう畏だってこと」

「ローンって畏なの？」

「そう、あなたを縛ることが出来る畏なの。借金をさせれば、あなたはそれを返済するために働かなきゃいけないからでしょ」

「でも、賃貸でもお金が必要だから働かなきゃいけないという意味では同じだと思うけど」

「賃貸ならイヤなら他に行くことができる。もっと賃貸料が安い物件に住み替えることもできる。でも、一度家を買ってしまったら、そう簡単に住み替えることはできないでしょ。結婚して子どもができたらもっとそう。動きが取れなくなるわよね。だから、我慢しても借金を返し続けるしかない。余程覚悟しなければその縛りから抜けることができない」

「でも、俺いつも思うんだよ、さくやさん」

「何を？」

「この人たち違ってさ、一人ひとり違う生活、人生があるんだよね」

「そりゃそうよ」

「このロマンスグレーの男性は、きつとどこかの会社の偉い人かな、偉いって言っても電車で通っているくらいだから、お抱え運転手がつく役員クラスじゃないよね、中間管理職的な？ 中学生か高校生くらいの子どもが二人いて、奥さんと四人で暮らしている感じ。頑張ってマンションを買ってローンを返している最中ってとこかな？ でもなんか不機嫌そうな顔だねえ、子どもが反抗的で手を焼いてる。そのことで奥さんと今朝ちよつとした言い争いでもしたかな？ この若いお兄ちゃんは、何か携帯を見てニヤニヤしているけど、この人ごみの中でよく携帯を触れるね。その表情を見ると会社に連絡している風でもない、きつと恋人と、電車止まって大変だよ〜みたいな甘えたやり取りしてるんじゃない？ で、この若いOL風の女性は・・・」

「よくそこまで自分勝手に妄想を膨らませられるわね」

「こうやって妄想していると一人ひとりの人生が見えてくるじゃない？ それって面白いよね。一人ひとりどんな生き方をしているんだらうって妄想していると、その人たちをリアルに感じることが出来るから面白いんだよ」

「そうね、一人ひとりにそれぞれの人生があるわよね」

「でもさ、それもまた不思議なんだけど、みんな同じに見えるんだよ。一人ひとりそれぞれだと思っていてのに、ふと見るとみんな同じに見える、ただの人の塊にしか見えないときがあるんだよね。特に朝の出勤時間帯に大きなマンションから一斉に人が出てくるのを見ると、すごく不思議な感覚に陥るときがある。みんな同じような色の服を着て、同じような色のカバン持って、同じような表情をしてる。今みんなマスクしていて、表情さえ見えないから誰かも分からない、知り合いに会っても分からないんじゃないかな？」

「没個性の社会だからね」

「没個性ねえ、でも、いくら没個性って言っても、人それぞれ生き方は違うよね。」

「みんなが同じ生活をしているわけじゃないのに」

「そうね、それぞれ違う生活はしているわ。でもね、価値観が没個性なのよ」

「どういうこと？」

「価値観がほとんど同じだから、それぞれ違う生活をしていると言っても、ほとんど同じ生活になっている。さっきも言っていたけど、ロマンスグレーの男性は家族がいて、子どもは二人くらいで、マンションをローンで買って、その返済をするために会社で働いているっていう価値観。あの人たちの中で、どのくらいの人と同じような生活をしているかしらね」

「そう言われれば確かにそうかも。あの若いお兄ちゃんもきつと恋人と結婚して、できれば郊外にでも大きめの戸建てを買って、そこで子どもを育てるっていう夢を見ているような感じがする。」



これは俺の勝手な妄想だけど(笑)」

「でも、社会自体がそれを望んでいるでしょ。年頃になったら早く結婚しなさいっていう圧力がかかってくる。そして、結婚したら子どもは？ って聞かれる。子どもを産み育てるのが当たり前のように言われるでしょ。そして、子どもができたらできたで、今度は家を買うの？ 家を買った方が子どもにもいいし、社会的にも信用を得ることができると言われる。」

その声を聞いているうちに、それがどんどん刷り込まれていくわよね。そして、いい人と結婚して子どもを産み育てて、家も買うのが幸せなことだと、それが自分の幸せだと思い込んでしまう。そして、それが夢であり、その夢を追い求めることが生きるための目的となってしまうの。子どもときからその夢を刷り込まれてしまっているの」

「いや、子どもにはそこまで言わないでしょ」

「一生懸命勉強して、いい学校に入りなさい、って言っているよね？ それはどうして？」

「そっか、確かにそうだ。いい学校に入って、大きな一流会社に就職したり、医者や弁護士みたいな社会的に地位のある資格を取れば、人生は勝ち組的な教育しているわ」

「それと同じ価値観を刷り込んでいるからよね。自分の好きなことをして、自分の好きな人生を生きなさいなんて教えてはくれない。小さな頃からいい学校、少しでも沢山稼ぐことができて、社会的にも羨ましがられるような仕事につけることが最良の道だと刷り込まれていく。そして、気がついたらみんなと同じ価値観、同じ生活、人生を目指している。服もカバンも同じような色、没個性

だけど、生き方も没個性になっているの。だから、人それぞれの生活がある、人生があるって言うても似たような感じだから、人が沢山いる個人ではなく、人の塊という感覚がするってことよ」

「没個性の幸せかあゝ・・・みんなが幸せって呼んでいるのは幸せじゃないってこと？」

「それを幸せだと思っただら幸せなんだろうけど。でも、自分で決めた幸せじゃないってことは確かだね。小さな頃からこれが人生の幸せなのよって親や周りの価値観を押し付けられ、その親を喜ばせるため、安心させるため、親も自分も他人に羨ましいと思わせるために生きることを目的としてしまっている。そして、それができれば勝ち組として認められ、できなければ負け組として肩身の狭い思いをして生きる。その目的さえ目指さない人は、負け組どころか落ちこぼれとして見られるから何としてもそれは避けたい。みんな本当は自分が何をしたいのかなど考えることもなく、ただ刷り込まれた幸せを目標に生きることになる。だから没個性な人しかいない社会になるってこと」

「それってなんで？ それを幸せだとかえるようになったのはいつから？ どういう経緯でそんな価値観になっているの？」

「これはまた歴史的な話になってくるけど、そういう価値観を持たせたいと思っっている人たちがいるってことよ」

「没個性にしておいた方が、いいって思う人がいるってこと？」

「そういうことね。みんなが同じ価値観を持って、それを目的として生きてくれたら楽に支配することができるから」

「支配ねえ、いつもさくやさんは支配されているって言うけど、支配されているって言われても、どうも現実感がないんだよね。そりゃ昔の奴隷のように手かせ足かせをされて働かされているならまだしも、俺たちは自由だし、仕事も自由に選べるし、誰かに支配されているっていう実感がないんだよね」

「それこそがもう支配されている証拠なのよ。あなたは自由だと思ってるけど、思考、考えがもうすでに自由じゃないってこと。さっきの話じゃないけど、人生の目的さえ操作されているでしょ。何が自分にとって幸せかということさえ考えることができなくなってるっていうのは、もう支配されているってことなの。いい？ 支配者たちがどうしていい会社に就職すること、いい人と結婚すること、優秀な子どもを育てること、いい家を買うこと、沢山稼ぐことをあなたたちの人生の目的にしているか分かる？」

「どうしてだろう？」

「あなたたちを縛るためよ。昔の奴隷制度と同じように、あなたたちを縛るため。今は目に見えて手かせ足かせをしたりすることはしないけど、思考を操作することであなたたちから自由を奪い縛り付けているの。結婚して家を建てるということは、生活に縛られるってことでしょ」

「でも、好きな人と結婚したいし、その人と暮らすために快適な家が欲しいって思うのは自然だし、縛られているわけじゃないと思うけど・・・」

「じゃ、たとえばローンのことを考えてみて」

「ローン？」

「そう、家を買うのにほとんどの人は銀行からお金を借りて買うでしょ。ローンって借金よね。言葉は柔らかく聞こえるけど、借金よね」

「そうだね、でも、家を買うくらいのお金はお金には出せないよ。だからって家を買えるくらいのお金を貯めようと思ったら、いつになるか分からない。もしかしたらずっと買えないかもしれない。なら、銀行から借りて家を買って住みながら返していった方が、合理的だと思うけど。賃貸に住んでいたら、その賃貸料を払いながらお金も貯めなきゃいけないことになるでしょ。それから賃貸料だと思えば、自分の家に住みながら返せるんだからそっちの方がいいと思うけど」

「それがもう罠だってこと」

「ローンって罠なの？」

「そう、あなたを縛ることが出来る罠なの。借金をさせれば、あなたはそれを返済するために働かなきゃいけなくなるでしょ」

「でも、賃貸でもお金が必要だから働かなきゃいけないという意味では同じだと思うけど」

「賃貸ならイヤなら他に行くことができる。もっと賃貸料が安い物件に住み替えることもできる。でも、一度家を買ってしまったら、そう簡単に住み替えることはできないでしょ。結婚して子どもができたらもっとそう。動きが取れなくなるわよね。だから、我慢しても借金を返し続けるしかない、余程覚悟しなければその縛りから抜けることができない」

「そう言われれば確かに・・・なかなか借金を踏み倒すなんてできない」

「あなたたちは、巧妙にお金で縛られているの。またローンの話になるけど、お金を借りるには利息が発生するわよね。その分沢山働かなきゃいけない。そして、何か起きてローンが返せなくなったらその家は没収されて売られることになり、売られてもローンより少ない金額だったら、残った借金は家がなくても返済しなければいけないことになってしまふ。だからお金を借りるということは首輪をつけられるのと同じことになるの」

「今は何でもローンで買えるからね。車もローンで買えるし、旅行もローンで行く人もいるし、ローンって言葉は、簡単に何でもできる魔法みたいに思ってしまうよ」

「だから、それが縛り付けるための罠だってこと。お金で縛り付けるのが一番早いし確実だからね」

「でも、どうしてそんなに庶民を縛り付けたいの？」

「それは人々から搾取するのが目的だから」

「搾取って？」

「さつきも言ったけど、奴隷制度の頃を考えてみて。人を人とも思わず、こき使う制度があったでしょ。形はまるで違うけど今の社会も同じようなことが行われているってこと」

「いや、いくらなんでも奴隷制度と今が同じって言うのは無茶があるでしょ、さくやさん」

「そうね、前の奴隷制度みたいに露骨な搾取はしていないわ。でもね、よく見てみたら今もすごく搾取されていることが分かると思うわよ」

「どこが？」

「こうなったら歴史の話からしないと分からないかな？」

「歴史ね・・・」

「日本で言えばまず明治維新ね。これは前にも話したけど、明治維新は一部の人たちのクーデターだった。明治維新はその一部の人たちの富のために、平和だった江戸の人たちを外国に売り渡したっていうのが事実」

「売り渡した・・・って。それは過激すぎるんじゃない？」

「明治維新で経済はどう変わった？」

「経済？ 資本主義が始まったってこと？」

「そうよね、明治維新から資本主義が始まったわ。イギリスをはじめ欧州の各国から資本主義を取り入れ工業を重視した。資本主義ってすごく簡単に言っちゃうと、資本を持った人が、人を使って工場で何かを作らせるっていうシステムよね。資本家と労働者の二つの階級に分かれた。資本家はお金を稼ぐことが目的、だから労働者を安く使いたい。なるべく人件費を減らして、尚且つ沢山の時間働かせて生産性を高めたいっていうのが資本家の本音。だから、とても過酷な労働条件で働かせたの。それは今と同じでしょ。ブラック企業っていう言葉に変わっているけど、やっていることは同じよね。究極は、報酬など払わずに好き勝手に労働させたいって思う。それが奴隷制度。だから本質は今も奴隷制度と変わらないって言ったの」

「でも、今は自由があるよ。働く時間も大体法律で決められているし、休みもあるし、奴隷制度とは違うよね」

「だから、さつきから言っているように思考で縛り付けているの。自分を自由だと思わせ、自分で何でも決めてるように思わせながら、実は支配者の都合のいいように操作されているってこと。同じような価値観を持たせ、同じような夢を追いかけさせ、借金で縛り付け、どこにも逃げられないような環境を作り上げるの。みんなどうして朝は何時から夜は何時まで働くみたいな時間を決められているの？」

「その方がみんな働きやすいから？」

「それがもう操作されている証拠よね。朝何時から夜の何時まで決まった時間働かせ、お昼の休憩も一斉に取らせておけば管理しやすいでしょ。挙句に仕事が残ったからと言って残業までやらされてる。時間内に仕事ができず残ってしまうっていうのは、その人の仕事のキャパシティを超えているってこと。ならば人を増やせばいいと思わない？ 時間内に終わらないくらい沢山の仕事があるならば、人を増やせば残業なんてしなくてよくなるわ。でもそれはしない、何故？」

「人件費を浮かすため？」

「そう。仕事が終わらないのはあなたの能力が足りないからだとすり替え、とにかく働かせようとする。これって労働力の搾取よね。そして、正社員だといろいろ保険などの保証もしなければいけないからと、最近は派遣を沢山使うようになってる。派遣はすぐに首を切ることができるから、

会社にとつてはとても便利だし、人件費も安く抑えられる。派遣はいつ首を切られるか分からないから少々無理なことを要求されても受け入れざるを得ない。それが平等な関係だと言える？」

「そう言われれば、派遣だけじゃなくて正社員も最近は酷い条件になってる。正社員は定額の働かせ放題・・・なんて言ってみんな笑ってるけど、笑いごとじゃないって思うよ」

「ね、形は違うけど資本家の考えは今も昔もそう変わらないってこと。労働者からどうやって搾取するかしか考えていない。税金なんてその最たるものよね。どうやって国民から多く搾り取るかが政治家の役割になってる。多く搾り取るアイデアを出せる官僚と政治家が重宝されるの。国も同じように資本主義のシステムだから」

「国は違うでしょ。国は営利団体じゃないから儲けは関係ないよね。国民のために税金を集めて使い道を決めるのが政治家や官僚でしょ。最近はいろいろ国も経済が大変みたいで税金も随分上がっているけどね」

「それもいいように言われて操作されているのよ。本当に支配者に都合よく教えられているわね」

「じゃあ、国は国民から搾取しているってどういうの？ 何のために？」

「今は国よりも企業の方が上なの。今というより明治からなんだけどね。企業の方が国のトップよりも発言権があるの」

「どういうこと？」

「企業のトップは社長だけど、それよりも発言権があるのは誰か分かる？」

「企業のトップよりも発言権がある人がいるの？」

「そう、株式会社は誰のものだと思う？」

「株主？」

「そう、企業のトップは株主の人たちの存在が怖い。あとは銀行ね。だからその人たちに儲けを出させないといけない。だから、できる限り労働者の労働力を搾取して儲けを出して、株主と銀行にお金を差し出さないといけないのよ。企業を左右するのは株主だってこと。そして、政治家になるには何が必要だと思う？」

「政治家としての夢、偉大なる理念、人々のために働く確固たる信念……なんつってさすがに思っていないけどさ、ま、お金は必要だよな」

「まずはお金がないと選挙にも立候補できないわ、選挙には沢山のお金がいるから。そのお金を出してくれる人がいるとする。そして、そのお金のおかげで立候補して、そのお金のおかげで選挙活動することができ、いろんなところに根回しすることができ、めでたく当選することができました。

さあ、その人は誰のために仕事をするでしょうか？」

「お金を出してくれた人の要求は拒否できないね」

「そうね、そんなことは子どもでも分かるわよね。お金を沢山出せるのは？」

「資本家？ 企業のトップ、企業の大株主……まあお金持ちだな」

「そういう人たちは、自分の会社の有利になるように政治家に働きかける。大企業のトップで団体を作って政治家たちに大きな圧力をかける。たとえば、大企業だけ税金を安くするようにとか。だから、消費税なども表向きには福祉などに使いますと言いながら、よく見てみると結局、企業の法人税を安くする補填に使われているっていう笑えないでき事が起きるの」

「俺もそれは聞いたことがある。酷い話だよ。消費税もそうだけど、東北のための復興税もほとんど復興に使われず、訳の分からないところに使われているんだよね」

「そう、そして外国の首相や大統領も同じ立場なの。資本主義の国は、どこも同じように企業の方が上なの。だから、お金を貢ぐためにいろいろなことを日本にも要求してくる。特に日本は、明治維新のときの借りがあから従わざるを得ない状況なの」

「日本が明治維新のときに何の借りを作ったの？」

「日本が……じゃなくて、今の日本の国を動かしている人たちって言った方がいいわね」

「どういうこと？」

「明治維新は、一部の人たちのクーデターだって言ったでしょ。その一部の人たちの子孫が、今の日本のトップだってこと。今日本を動かしている政治家のトップは、そのクーデターを起こした人たちの子孫。これは、ちよつと調べれば分かるわ。明治維新からずっと世襲でそのトップの地位を引き継いでいるの。その明治維新の立役者（クーデターを起こした人たち）は、外国の力を借りて

クーデターを成功させた。だから、明治維新からゴロツといろいろな制度が変わったの。資本主義になって、株式会社ができ、金融システムも大きく変わり、教育システムも外国のシステムを取り入れた。すべて外国の命令でなされたこと。だからその人たちは最初から逆らえないし、今でも逆らえない。戦争を起こせと言われたら起こすしかないの。これは余談になるけど、戦争って自然発生的に起きるものじゃない。世界の資本家たちが儲けるために起こしているの」

「戦争を？ 金儲けのために？」

「そう、戦争ってね、彼らにとっては、とても大きなビジネスなの。大きな儲けになるの。」

だから、昔から戦争はなくなるらない。どんなに人々が平和を願っても、彼らが戦争をすると決めたら戦争は起きる。だから、約二六〇年間続いた江戸時代には戦争はなかったけど、明治になってから次から次へと戦争が起きたでしょ。それは世界の資本家たちの命令だったってこと。命令されて戦争をしていたの。最初からどこの国がどうやって仕掛けて、どこが勝つかって分かっているのよ、彼らには。だって彼らがすべて絵を描いているんだから」

「酷い話だよな」

「そう、だから政治家は資本家には頭が上がらない。それで、国民から沢山税金を搾り取って彼ら資本家に貢がなければいけないの」

「その搾取が始まったのは明治維新からなの？」

「日本ではね。まあ、江戸時代前の日本は、外国と同じように搾取の社会だったけど。搾取の全くない縄文時代が終わってから戦国の世と言われる頃まで、ずっと豪族や貴族と呼ばれた上流階級の人たちが庶民から搾取していたのは知ってるでしょ？」

「大陸から渡ってきた人たちが、どんどん日本列島に入ってきて、所有という概念ができてきて、その中から力で台頭してきた人たちが庶民を支配していったってことでしょ」

「力の強い人たちが土地の所有を争って、戦さばかりしていた時代。少しでも自分の土地を広げようとしていた時代。力のない人たちはその力の強い人たちの所有物とみなされ、労働力として使われ搾取されていた。それは奴隷と言っても過言じゃない扱いだった。自分たちにはまるで関係のない戦さにも駆り出され、知らない庶民同士でお互い傷つけ合うという酷い時代が長く続いたの。富も搾取され、身体さえも貴族たちにいよいよに使われるという人権も何もない世の中。それがイヤで信長君たちが搾取のない、庶民が平和に暮らせる江戸時代を創ったってわけ。そういう意味では信長君たちが創った江戸時代っていうのは、特殊な時代だったってことね」

「江戸時代以外ずっと庶民は搾取されてきたってこと？」

「そう、今なんて搾取されていることさえ気が付かないほど酷い世の中になっているわね」

「でも、今は戦争はしていないよ。土地の取り合いもしていないけど」

「今はそんなに露骨なやり方はしていないけど、でも、もしかしたらそれよりも、もっと酷いやり方をしているかもしれないわね」

「どういうこと？」

「明治維新が起きてから戦争が続いたわよね、それに駆り出されたのは庶民。これはさつき言った弥生から戦国の時代と一緒でしょ。イヤだと言ってもムリヤリに戦争に行かされた。赤紙一枚で行かざるを得ない状況だったのは知ってるでしょ。それって、そんなに昔の話じゃない。たかだか七十年ほど前の話。まだその頃の戦争を体験した人も生きていくくらい最近の話。この話だけでも分かるでしょ。いつまでもあなたたちを支配している人たちは、何も変わっていないってこと」「でも戦争は起きていない、ムリに戦争に駆り出されたりしていないし。まあ、税金とかで搾取されてはいるな、とは感じるけどね。でも肉体的には自由だよ」

「そう？ 今、みんな肉体的に自由？」

「もうさくやさん、イヤなことばかり言うよね。俺たちが奴隷だって言いたいの？ なんか腹立つんだけど。だって誰も縛られたりしてないし、殴られて労働させられることもないし。まあブラック企業で肉体的にも酷いことをされたとかいう話はチラホラ聞くけど、それは特殊な話であって、普通に暮らしている分には別に肉体的には何もされていないんだから」

「本当に深く思考の操作が入ってるわね」

「何が思考の操作なのか分からないよ。そこまで言うなら、どこから思考を操作されているのか具体的に教えてよ」

「まず、どうしてみんな同じ時間に同じことをしているのか？ って考えたことある？」

「まあ、その方が効率がいいからでしょ。社会としても・・・」

「効率ねえ、もつと寝ていたいと思っても起きなきゃいけない、休みたいと思っても休めない、食べたいと思っても食べられない。これって肉体的にも自由じゃないってことにならない？ それって身体を縛られてはいないけど自由じゃないんじゃない？ 同じ時間に電車に乗るからラッシュになる。時間をずらして乗ればいいのに会社が始まる時間がほぼ一緒だから皆同じ時間に乗らなくてはいけない。ラッシュの満員電車は苦痛以外の何ものでもないわよね。それって身体を縛られているのと大して変わらないと思うけど・・・」

「縛られていないけど・・・そう言われればそうだよ」

「それが思考の操作なのよ。思考の操作はとも巧妙で、自分で決めたと思わされているの。自分で決めて、自分で判断して、行動していると思込まされているの。これが支配されていることに気が付かない一番の原因ね」

「自分で決めていると、思込まされている？」

「そう、自分で考えて決めていると思込まされているから、自ら進んで彼らの思い通りに動いているの。今の社会を見てみたらよく分かるわ。どれだけ自分で考えていないかってことが」

「たとえばどういうこと？」

「そうね、マスクがそうよね」

「マスク？」

「そう、マスク。今、皆マスクをしているでしょ？」

「してるね、ほぼ全員って言っていていくらいマスクをしてる」

「たとえばね、マスクをしている人に、どうしてあなたはマスクをしているのですか？　って聞いてみたらよく分かるわ。皆どう答えるかしら？」

「え？」

「自分の理論をしっかりとと言える人が、どれだけいるかってこと」

「マスクに関しての自分の理論？」

「そう、何のためにマスクをしているのか？」

「ウイルスが怖いからって、きつと答えるんじゃない？」

「じゃあ、そのウイルスがどれだけ怖いもので、マスクをすることでどれだけウイルスを防ぐことができるかを、しっかりと答えることができる人がどれだけいると思う？」

「そう言えば、俺も時々マスクをしてくださいって言われるけど、何故しなければいけないのかを説明してくれる人はいないねえ。そう決まっていますから、ルールですから、マナーですから、このご時世ですから、っていう言葉ばかり。そうそうこの前、このご時世ですからって言われたから、どのご時世ですか？　って聞いたたら知らん顔されたよ。そしてただただ、マスクをしてくださいの一点張りで話にならなかった」

「それはもう完全なる思考の操作よね。これも身体を不自由にされているってことじゃない？　口を塞ぐように言われて従っているのは、身体的に縛られているのと変わらないでしょ」

「そう言われたら、そうかもしれない・・・」

「何のためにマスクをしているかさえ分からず、ただ怖いウイルスが流行っているからマスクをしなさいって言われて、何も考えずにマスクをしているっていう状況ってどう？　支配階級は嬉しくて仕方ないわよ。庶民が自分たちの命令に何も考えず従順に従ってくれるんだから。そりゃ何をしてもいいって思われるわよ。そんなに従順にしてたらマスクだけじゃ終わらない。次から次へとどんどん要求が大きくなって、どんどん自由を奪われて、彼らの思い通りの社会になっていく」

「彼らの思い通りの社会って？」

「世界統一政府」

「何それ？　陰謀論ってやつ？　子ども番組の戦隊モノじゃあるまいし、そんなこと起きるわけないじゃない、笑っちゃうよ」

「そこがもう思考操作だっていうの。国の偉い人たちが、そんなバカなことを考えているわけないでしょ、テレビの見過ぎ、陰謀論の聞き過ぎ、あり得ないよ、って思わされているの。彼らがしていることをしっかりと見てみれば！　今の状況をしっかりと見てみれば！　何が起きてる？」



「コロナ騒ぎ？」

「そうね、これは彼らが一気に仕掛けてきたことなの」

「一気に仕掛けるって、何を？」

「だから、一気に世界統一政府に向けて仕掛けてきたのよ」

「だから、世界統一政府って何よ。統一政府の意味が分からないよ。そんなことをして、どうしようとしているの？」

「世界中を一つのピラミッドにしようとしているのよ。まあ、今でもほとんど一つって言えば一つなんだけど、もっと顕著に一つのピラミッドで、人々を支配しようとしているの。今世界にはいくつもの国があるでしょ。その国を全部取っ払って一つの国、政府を作ろうとしているって言えば分かりやすいかしらね」

「一つの政府を作ってどうするの？ そこに何の利点があるの？」

「今も大きなピラミッドの中に小さなピラミッドがあるんだけど、その小さなピラミッドを壊して大きなピラミッド一つに集約しようとしているの。どこの地域も同じような支配体系にしたいの。どこの地域も金太郎飴のように没個性にしたいの。もちろん人々もそう。大きなピラミッドにしてトップの人たちの命令にただひたすら従う人々を作りたいの。アトランティスの頃の社会をもう一度作りたいたいってこと」

「アトランティスの頃って、大昔のおとぎ話みたいだね」

「アトランティスってね、ものすごく効率よく搾取ができた社会だったのよ。もともと人間がどう

やって誕生したか知ってるわよね」

「レプティリアンっていう宇宙人が遺伝子操作をして人間を創ったって話は知ってる」

「何のために？」

「労働力として使うために」

「そうよね、だから、ずっとピラミッド社会の中で、人間たちは搾取されてきた」

「うん、だから、今更またアトランティスを創らなくてもいいんじゃないの？ もう十分搾取することができているんだから」

「そこなのよ」

「どこなのよ？」

「人間たちが変わってきてるの。人々が変わってきたの」

「変わってきたってどういうこと？」

「彼らの支配から離れようとし始めたのよ。波動が変わって彼らは困っているの」

「人々の波動が変わってきたってこと？」

「そう、だから今までみたいなやり方が通用しなくなってきたの。だから、彼らの手から離れる前にもう一度彼らの檻の中に閉じ込めようとしている。それが今起きている、起こされている騒動なの」

「波動が変わっているってどういふこと？」

「波動って言うのと難しそうに聞こえるから、価値観が変わったと言った方が分かりやすいかな？」  
「価値観が変わってきてる？」

「そう、波動が軽くなってくると価値観も変わってくるの」

「どうして波動が軽くなってきたの？」

「テラの波動が変わってきたから。この話は前にもしたと思うけど、テラは軽い波動領域に移行しているの。だから、テラに住んでる人たちの波動もそれに共振して軽くなりはじめた。これはなっただじゃないからね、まだなりはじめたという段階。軽くなると価値観も変わるでしょ。今までみたいに物質ばかりを重視していた価値観、競争の価値観から、人との繋がりに価値観を置くようになってきたの」

「波動が軽くなると物質を重視しなくなるってこと？」

「物質を重視しなくなるんじゃないかと、人より沢山、いい物を欲し思って思わなくなるって感じかしら。人よりいい物（高価な物）を沢山持っていることが社会的に素晴らしい人、成功した人という価値観が競争を生み出すでしょ」

「そっだよ、競争するから社会は繁栄するんだよね」

「繁栄ねえ、何を繁栄と言うかってことだけど。あなたたちの社会で言われている繁栄は経済でしょ。経済が大きくなることを繁栄って言ってるのよね」

「そう言われればそうかな」

「経済の繁栄っていうのは物質が豊かにあって、それを享受することができてる人が多くなるってことよね。でも、最近はどう？」

「どう？ って何が？」

「経済は繁栄している？」

「そう言えば最近のコロナ騒動で経済は酷いことになってる。コロナの温床みたいに言われた飲食店などは本当に苦しいことになってる」

「飲食店を目的にしたっていうのも、まあ理由があるんだけどね。それは後から話をするとして、じゃあ、コロナの前は、皆豊かだった？ 何も不自由はなかった？」

「そんなことはないよ、税金は高いし、給料は上がらないし、どんどん人々の生活は苦しくなっていくってだよ。そこにこのコロナ騒動でもっと酷いことになってる」

「コロナ騒動の前から経済は低迷していたわ。でも、お金持ちほとんどもお金持ちになっていくという貧富の差が激しくなっていたでしょ。税金という国からの搾取も酷くなって、人々は働いても豊かさなど感じられなくなってしまっていたわよね。そうすると人々は何を求めはじめると思う？」

「人々が求めはじめめるもの？ お金？」

「お金ももちろん欲しいとは思うけど、あまりにも貧富の差が激しくなってくるとお金を求めることに嫌気がさしてくる。そうでしょ、朝から晩まで働いても大してお金にならないのに、世の中では競争に勝った人たちが優雅に暮らしている。そして、そういう情報がどんどん流れてくるのを見て、自分の生活と比べてイヤになってくるわよね。どんなに求めても、そんなお金持ちの人たちの生活なんて自分にはムリ。求めようと思えば思うほど、どんどん自分が惨めになったりしてくる。お金の価値を置くこと、競争に価値を置くことに振り子が振り切ってしまうと、どうなると思う？」

「振り子が振り切ると・・・反対側に動きはじめるよね」

「そう、だから人々は物質的なことよりも、競争しなくてもいいような穏やかな生活を求めはじめようになってきたの。価値観が変わってきたってことね」

「そういうことか、何となく分かる気がする」

「そしてね、経済の繁栄というのも限界があるの。ずっと繁栄し続けることはできない。

貧富の差が大きくなると人々は物を買うことをしなくなる、そうでしょ？ 買うことをしなくなるというより買えなくなるよね」

「まあ、お金がないから欲しくても買えないってことになるね」

「そうなる？物が売れない・・・物が売れないと会社は儲からない。需要がないといくら物を作っ

ても売れない。困ったねということになる。どこでお金を儲けようかと考えるよね」

「そうだね」

「そこで考えだしたのが、コロナの騒動ってこと」

「どういうこと？」

「人々の価値観が変わってきて物よりも人との関係を重視するようになってきた。そして、物も売れなくなつて儲からない。どうする？」

「だからって、コロナと何が関係あるの？」

「今の状況をよく見てみて、ものすごく売れているものがあるでしょ？」

「何？ 何が売れてる？」

「ワクチン」

「え？ マジで？ ワクチンは商売で売るといふより人々の健康のために・・・な、訳ないか」

「医療はビジネスだからね。そして、病院も検査やワクチンによって儲かる。直接庶民からお金を貰わないとしても、国などから補助金という名目でお金が入る。それに付随するマスクや消毒液などコロナ騒動によつてもものすごく業績を伸ばしている会社があるわね、それもほぼ医療関係の会社でしょ。医療関係の業績はうなぎ上り、そして、医療関係の会社はもつと前から経済におい

て大きな立ち位置を占めていた」

「でも、そんな都合よくコロナが流行るってことないよね。ウイルスなんて自然に発生するものなんだから」

「それ」

「どれ？」

「マッチポンプって言葉知ってる？」

「マッチポンプって自分で火をつけて、自分で消すっていうやつ？」

「そう」

「そのマッチポンプが何の関係があるの……ってマジかよ」

「そう自分で火をつけて、自分で消して回っているってこと。消して回っているならまだしも、もっと燃料をくべてボウボウ燃やし続けているってことよ」

「ちよつと待ってよ、火をつけるって言ってもどうやって？」

「自分でウイルスを作ってバラまいたってことよ」

「嘘だろ？ ありえないよ。人の命に関わってくるんだよ。いくら何でもそんな酷いことができる人間なんていないよ」

「価値観が違うのよ、価値観が……」

「え？ 価値観が違えばそんな酷いこともできるって言ってるの？」

「最初の話に戻るけど、資本家は労働者に何を求めているんだっけ？」

「労働力？」

「人々をできるだけ長い時間働かせて物を作らせたりして、資本家にお金を儲けさせたいのよね。どんどん搾取したいのよね。労働者の身体や心になんて関心はない、そうでしょ。労働者がすり減って使えなくなっても次がいるって思っているくらいなのよ。労働者の幸せなど考えていない、どうやってもっと多く搾取しようかと思っただけなのよ。そういう人たちがあなたの社会のトップにいて社会を動かしているの。世界的な大きな企業の株主たちは、国などの組織のもっと上にいて権力を持っているの」

「そのくらいのことはずるってこと？」

「実際にやってるでしょ」

「もしかしてそのウイルスっていうのもその人たちが作ってバラまいたって言いたいの？」

「そうね、彼らの思うほどではなかったけど。結局机上の空論で、大したウイルスにはならなかったけど、でも、そこで彼らの仲間であるマスコミを利用したの」

「マスコミって、彼らの仲間なの？」

「新聞社もテレビ局もよく調べれば大資本家が株を持っているわよね。」

資本家、スポンサーの言うことを聞かなければどうなる？」

「潰れる？」

「でしょ、ならどっちを向いて情報を流す？」

「資本家、スポンサーだね」

「そうなるも命令されたことだけを庶民に報道するわ」

「真実は報道されないってわけか」

「みんな自分がかわいいからね」

「ウイルス騒動はマスコミが作っているってこと？」

「ウイルスは机上の空論で、実験室から出たら、かなり弱毒化したのよ。実験室と実際の環境は違うから。自然には実験室にはいない細菌が沢山いるでしょ。その作用で実験室から出たウイルスは弱毒化されてしまったの。でもね、その方が結果的にはよかったのよ」

「どうして？ 弱毒化されたら怖がらすことができないじゃない？」

「そのまま毒性の強いウイルスだったら広めることができないから」

「どういうこと？」

「すぐ強力で触れたらすぐに死んでしまうようなウイルスだったら、世界中に広がらないわ。すぐに死んでしまうくらい大変な症状ならどこにも行かないし、そんなに人と会わないから人にうつすことがない。でしょ？ 人から人にうつって広がることもない。だから、一見すごく怖いけど、

広まらないから実際は何も起こすことができないわよね」

「そう言われればそうだね。それこそ実験室の近くの地域で止まってしまおうね」

「だから、弱毒化した方が結果的にはよかったの。そして、風評的に怖さだけを煽っていけばよかった。マスコミとかを使って街でバタバタと人が倒れていきます、とか、何十万人が死にます、とか、煽って煽って煽りまくることで、人は何も実態がなくても、ただ怖いという雰囲気で怖がってくれる。そうしたら、ウイルスを撲滅するためにという理由をつければ何でも言うことを聞いてくれるようになる。マスクをしなさいと言われれば、素直にマスクするし、ワクチンを打ちなさいと言われれば、素直に何回でも打つ」

「でもさ、最初の頃に言われていたように道でバタバタ倒れている人もいないし、病院もガラガラ。皆マスク以外はほとんど普通に生活しているし、なんかおかしいって思わないのかな？」

「そこが教育のなせる技なのよ」

「教育のなせる技？」

「そう、小さな頃から教育機関で何を教わってるか知ってる？」

「勉強でしょ。生きていくために必要な知識でしょ」

「本当にそう思ってる？」

「いや、思ってるも何も、それしかないでしょ」

「これもまた思考操作のなせる技だわね」

「何言ってるの、さくやさん」

「学校の本当の目的は、没個性な人を養成することなの。学校で教える知識は生きる上においてほとんど必要ないものだったこと」

「そんなことはないんじゃない？ 使えるものはあるよ。それに学校の勉強は、知識だけじゃなくて考える力を養うためだって先生も言ってたしね」

「考える力を養うため？ じゃあ、先生に何か質問したことある？」

「勉強のこと？」

「勉強のことでも人生の相談でも、宇宙のことでも何でもいいわ」

「あんまりないかな？」

「どうして？」

「相談しても大した答えは返ってこなかったし・・・そうそう、恋愛の相談したときに返ってきた答えが、学生の本分は勉強なんだから、そんな恋愛なんかにつつつを抜かしてないでしっかりと勉強しなさいって反対に叱られたわ。それから何も相談しなくなったかな、進路のときもそうだったっけ、学校の成績と学外のテストの成績で、この学校なら受かることばかりだったかな。将来何がしたいのかとか、何の勉強がしたいのかとかの話はほとんどなくて、どの学校に受かるかの

話ばかりだったような記憶がある。授業のことで分からないことがあったときも、そう言えばとにかくそのまま覚えればいい、そんなことはテストには出ないからって言われたこともあったな」

「それが学校の実態よね。学校の勉強は考えさせる勉強じゃなくて、テストの点数を上げる勉強なのよ、だから暗記ばかりさせるの。歴史もそうでしょ。歴史上の人物がどういう理由でどういうことをした、ということとはほとんど教えずに、年号と事件の名前ばかりを覚えさせる。そんなことじゃ考える力は育たないわよ。何かからイメージする力も育たない。そして、テストもほとんどが選択問題でしょ。あらかじめ与えられた選択肢の中から選びなさいっていう問題ばかり。これには大きな落とし穴があるの」

「落とし穴？」

「そう、自分で考える力が本当になくなってしまいうっていう落とし穴ね」

「選択問題が、考える力をそいでしまうってこと？」

「だって、この中から正解を選びなさいっていうことでしょ。この中にしか正解はありませんっていうことでしょ。そして、授業では正解を覚えなさいって言われるでしょ。そうしたら、自分で考えることをやめて正解だけを覚えて、与えられた選択肢の中から、覚えた正解を見つけてるってことを繰り返していけば、どうなる？」

「自分で考える必要はない？」

「そう、選択肢以外に答えはない。その選択肢は誰かが考えた正解。自分で考えて導き出した答えじゃない。そして、自分で考えて導き出した答えは、間違いとされて相手にもしてもらえない。なら自分で考えるよりも誰かが教えてくれた正解とされる答えを覚えた方が得だと思うわ。こうして自分で考えることをやめてしまうの」

「先生が教えてくれる答えだけが、正しい答えだってことか」

「正しい答えなんてないの、皆考え方が違うんだから。科学だって数学だって答えは一つじゃないのよ」

「科学や数学は答えは一つでしょ、さすがに・・・」

「ならば科学誌なんかでいろいろ論文があるのはおかしくない？ 答えが一つならば、どの論文が正しくて、どの論文はおかしいなんて論争は起きないわよね。論争が起きるといことは答えが一つじゃないってことよね。数学でもいくつも数式があるでしょ。それもどの数式が正しいかの論争してるんじゃない？」

「そう言われれば・・・」

「特に国語や道徳、音楽、美術などこそ答えなんてない。教科書に載ってる文学作品について語り合うならばまだしも、答えは一つ、それ以外は間違い、なんてありえない話でしょ、人によって読み方はそれぞれ違うんだから。感じ方もそれぞれ違うんだから。だから文学は面白いでしょ。芸術もそう。芸術に点数をつけることなんて誰もできない。美術のテストも結局、この絵は誰が何年に描いたかっていうような記憶問題になる。そして、それも憶測にすぎない答えでしょ。その絵を描いた本人が本当にそう思ってる描いたのかも分からないまま、後の時代の人が勝手に想像しているだけ。それを勝手に正解だとしているだけ。それを覚えなさいって言われて、ひたすら覚え続けるという授業に、覚えたものをただ書くというテスト。そして、実技は先生の好き嫌いで一方的に点数をつけられてしまう。考える力なんてつかないわよ」

「学校って・・・」

「そして、もっと大きな弊害があるのよ」

「まだ？」

「そう、明治維新から始まった今の学校システムは何を基礎としてできたか知ってる？」

「イギリスの学校システム？」

「システマ的にはそうだけど、今の日本の学校は軍隊を基礎として作られたの」

「軍隊？」

「そう、だから、命令一つで、皆が一斉に動くように教育される。ピツて笛を先生が鳴らしたら一

「齊に皆が走りはじめるとか、ずっと行進の練習ばかりさせられるとか」

「そう言えばあった、あった。運動会の前なんか一時間ずっとただただ行進させられたよ。一人でもちよっとずれると皆が怒られたりしてね。組体操とかもピツという笛に合わせて形を変えたりしてね。イヤだったなあ」

「そして、制服ね。皆同じ服を着なきゃいけないというのも軍隊式でしょ。スカートの長さや靴下まで指図される。カバンも決められていて、好きなアクセサリーもつけられない。ちよっと個人的なものをつけようものならすぐに没収。とにかく皆と同じようにしなければいけない。ここでまた大きな問題になるのが・・・」

「何？」

「権威主義を刷り込まれるってこと」

「権威主義？」

「さっき話したように勉強も先生の答えが正解とされ、学校の中の生活も先生たちが決めたルールに従うように教育される。異議は認められない。ただただ先生の言うことを聞かなければいけないと教え込まれる。先生は偉い、自分より偉い。だから自分より偉い人の命令は絶対に守らなければいけない。守らなければ罰を受けると毎日刷り込まれるの。これが今起きている騒動にも大きな影

響を及ぼしている。だから、教育のなせる技ねって言ったの」

「学校教育で教え込まれるのは権威主義・・・」

「没個性の人間にすることが目的っていうこと。没個性で尚且つ命令を待つ人」

「命令を待つ人？」

「自分では何もできない、誰か私に命令してって思う人たち。だから、マスコミの言うことを素直に聞いてしまうの。マスコミに出てくる偉い人、大学の教授やどこぞの研究所の所長、医者、科学者、法律家などの肩書を持つ人。最近は何の専門家か分からない人までテレビに出てくる。専門家、有識者という肩書だけの人も、きつとテレビに出ているんだから自分よりも沢山知識があつて正解を導き出してくれる、助けてくれると思ってしまう。何の専門家なのか、有識者って何なのかという 것도疑問に思うことなく、ただテレビに出ているんだからすごい人なんだと思ってしまう。すごい人が言うんだから本当なんだろうと思ひ、その人たちがどれだけ矛盾したことを言っても、何も疑問も持たない。だから、今起こされていることにもおかしいと思わないの」

「おかしいとも思えないってことか」

「そうね、だから、ウィルスから守るためですって言われれば、どんなことでも受け入れてしまう。どんなに自分たちの自由が剥奪されても仕方がないって思つて我慢するの。そして、偉い人が決めたことに従わない人を見ると、とても腹立たしくなつて、あなたも私のようにしっかりと偉い人の言うことに従つて我慢しなさい、我慢しないのは自分勝手、わがまま、最低の人だと思つて攻撃し



ようとするの。これもあなたたちを都合よく支配したい人にとっては好都合よね。人々がお互い言い争ってくれば好都合だから。だから、わざと人々を分断させるようなこともするわけ」

「分断させるって？」

「〇〇派、××派、って言葉を流行らせるの」

「確かに、マスクする派、しない派、って言ってるよね。ワクチン、反ワクチンという言葉もある」

「そうして庶民がお互い睨み合ってくれば、彼らもすぐやりやすい。マッチポンプを仕掛けたかがあるってものよ」

「そうそう、そのマッチポンプの話だけど、庶民の波動？ 価値観？ が変わってきたから自分でマッチを擦ってこの騒動を起こしたって話はどうなったっけ？」

「そうそう、その話ね。人々の波動が変わって価値観も変わってきたから、もう一度人々の波動を重くするためにこの騒動を起こしたのよ。物質に価値を持たせて、人より少しでも物質的に豊かになるうとして競争させることで、資本主義は成り立つの。それは分かるわよね。人々が競争するよいうに物を欲しがると会社は儲かる。物を買うためにひたすら働いてくれば、資本家は労働力も購買客も得ることが出来る。資本家にとって、とてもいい循環が起きる。でも人々が物を欲しがらず、人との繋がりの方を重視するようになると資本家は困る。そうよね、だから、人々の繋がりを分断しようとしているの。ウイルス騒動で製薬会社や医療関係などが儲かるのと同時に、人々も分断す

ることができれば一石二鳥」

「でも、どうやって人々を分断させるの？ そうか、さっき言ってたようにマスクする派としない派に分けるってことか」

「それもあんだけど、この騒ぎでまず何が起きた？」

「何が起きた？ 皆がマスクをしはじめた。それから、変なビニールが店の中にヒラヒラしはじめた。それから、床になんか変な足跡が付いたよね。なんかソーシャルダンスとかいう言葉が出てきて、人との距離は二メートル離れてくださいとか言い出した。電車の中ではマスクをした上で会話もしないでください、ってアナウンスが流れ、変な奴がテレビでマスクをしながら食事しなさいとか何とか言いだして、新しい生活様式なんて訳の分からないルールができたし、学校では机に段ボールで囲いをして、給食も前向いて誰ともしゃべらず、ただ黙々と食えなどといって巷でも黙食なんて気持ちの悪い看板が出てたりする。新しい生活様式なんか知らないけど、ホント気持ちが悪いや」

「それよね・・・分断」

「そっか、こうして人々が触れ合うことができないようにしているんだ。人と触れ合えば、ウイ

ルスがうつるっていうことか。お互いバイキン呼ばわり、怖いから近づくな、しゃべるな、触れ合うな、ってか。めちゃめちゃ気持ち悪かったのが、マスクをしたままキスをしているカップルを見たとき。何やそれ！ 意味分からんってなったよ。ならキスするなよ！ 手を繋ぐなよ！」

「まあ、まあ、落ち着いて。とにかく人と触れ合わせたくないの。人は肌が触れ合うと気持ちが悪くなるの。肌だけじゃなくて話をするでもお互いのエネルギーの交流ができる。気持ちよく交流することができれば、ある意味エクスタシーを感じることもできるの。エクスタシーって、セックスのときだけ感じるんじゃないかって、セックスを含めて人と触れ合う、話をして理解し合えたというときにも感じる快感なの。人々はそれを求めているの。そして、そういうところで満足することができれば、そんなに物質的な物は欲しいと思わなくなる。買っても買っても次から次へと物が欲しくなるっていうのは、欲求不満が原因ってことが多いのよ。エネルギーが枯渇しているから物を買うことで、それを埋め合わせようとするの。買い物依存症とかっていう言葉あるでしょ。それは、その物が欲しいんじゃないじゃなくて買うことで気持ちが落ち着くから。そういう意味でも人々に満足して欲しくないの。肉体的にも精神的にもエクスタシーを感じると波動は軽くなって、価値観も変わってくる。だから、人が触れ合わないように、話をしないように、そして歩かないように、新しい生活様式などということを始めたの。自粛などといって歩かないようにさせて孤立させるの。ウイルスのせいになれば、人々は素直に従うから。人と触れ合ったり話ができれば、ものすごく欲求不満になるの。そして、また次の段階に進めたの」

「次の段階？」

「次はもっと楽しみを取り上げるようにしていったの」

「楽しみを取り上げる？」

「そう、人と触れ合うな、話をするなどといっても飲食店ではやっぱり楽しくなってしゃべるし、何だかんだで触れ合うでしょ。だから、飲食店を閉めさせたの」

「あ、そういうことか。なんで飲食店なんだろうって思ってたけど、そういうことだったのか」

「そして、次にお酒ね」

「お酒ね・・・」

「人との繋がりにはお酒も大きな役割を持っているでしょ。お酒が入れば気持ちも緩んで楽しくなってくる。だからお酒を飲ませないようにしたの。お酒を飲んで人と話がしたい人は、そういう状況でお店に行ってもすぐ欲求不満になるから、飲食店に行かなくなるでしょ。こうして家飲みなんて言葉を作って、また家に閉じ込めようとしたの」

「でもさ、それじゃあ飲食店から文句が出るよね。人が来なくなったら飲食店は困るんだから。でも、なんか知らないけど皆素直に言うこと聞いて店を閉めたんだよね。何ヶ月も営業しない店もあった。不思議だよね」

「お金よ。ウイルス撲滅のために協力して店を閉めてくれたら支援金、給付金として、いくらか差

し上げますって言われて、ウイルス撲滅のため、人のためになるし、お金も貰えるならってことで、皆素直に休業したのよ」

「金か・・・」

「まあ、そうよね、お店側にしたら、店を開けたら皆にバッシングされるリスクもあるし、それなら素直に従ってお金貰った方がいって思うわ」

「そう言えば、国や自治体のお願いという名の強制に従わない店は名前を公表する、なんて脅しもしたね。ホント、やり方が汚い！　そこまでするかってびっくりしたよ」

「脅しとお金という二ンジンをぶら下げられて店も仕方なかったのよ。そして本来は国や自治体が入り込むことができないはずの個人の自由である飲食店の営業まで、コントロールすることができると分かった彼らは、もつとできると思ったのよ。もつと人々から楽しみを奪うことができると思った」

「何か本気で腹が立ってきた」

「今度は人が集まるイベントにまで本格的に口を出してきた。ウイルスの蔓延を防ぐためにイベントは休止してくださいってね。そこにも脅しとお金が絡んで皆従うしかなかった。従わずに開催してクラスターが発生したらどうするんですか？　責任取れるんですか？　と言われたら主催者も怖いよね。だから皆、不承不承従わざるを得ない状況だったってこと。こうして次から次へと人々から自由を奪っていったの」

「だけどき、自分たちのイベントはやったでしょう。オリンピックもそうだし、自分たちがやりたいうって思うことは中止しなかった。これってどういうことよ。ものすごい矛盾だよね」

「それが支配者の勝手なところ。支配者は自分たちは何をしてもいいと思ってるの。それどころか自分たちが人々のために楽しみを提供してあげているって思ってるの。自分たちがどれほど矛盾していることをしているか認識していないのよ。たとえ認識していたとしてもムリにでもやるしかない。庶民が何を言おうとやるしかないのよ」

「やるしかないって、何故なの？」

「オリンピックは東京都が主催者だと言ってもやっぱり国も関わってくるでしょ。東京都の知事も国のトップもその上の人たちの命令に従わなければいけない」

「その上の人たちって、大企業やスポンサー？」

「そう、オリンピックとかには大きな利権が関わってくるでしょ、スポンサーも日本の企業だけじゃない。そして、報道にも大きなお金が関わっているし、会場を作るにしても建築会社も関わってくる。あっちこっちの国や企業からやれやれって言われたら、どんなに矛盾していてもやるしかないってことよ」

「そう言えばオリンピックすごかったよね。誘致したときはコンパクトなオリンピックにします。お金はかけません、なんて言っておきながら、いざ蓋を開けてみたら世界でも飛びぬけてお金の多かったイベントになってた。どんだけ中抜きしているんだよって感じ」

「オリンピック自体がもうスポーツの祭典じゃなくて、お金儲けの祭典になってるからね。お金が儲かるから皆やりたがるの。でも、実際にお金が儲かるのはやっぱり企業だけで、負債を負うのは結局国民。だから、いくらでも費用を増やしてくるの。自分たちの懐は痛まないし、痛むどころかどんどんあぶく銭が入ってくるんだから。これが資本主義ね。富める者はもっと富み、搾取される者はますます搾取されて貧しくなっていく。明治の頃から何も変わっていない。企業、スポンサー、オリンピック委員会などに首根っこを押さえられている自治体や国の長は、何が何でもやるしかないの。だから、無理矢理にでも、このような状況の中、少しでも皆様に元気を与えられるように・・・なくんって苦しい言葉を使って何とか国民を煙に巻こうとしたってわけ」

「でもさ、国民も楽しんでたよ。コロナ、コロナって怖がりながら、オリンピックは別物みたいな言い方していたのを聞いて呆れたっていうのが正直な気持ちかな」

「そうね、だからもつとやっていいと思われたのよ。国技だという理由で相撲もOK、野球なども大企業が絡んでいるからOK、でも同じ野球でも甲子園はダメ、学校の修学旅行はダメなんて言い出すの。自分たちは企業にせつつかれてGOTOトラベルなんて言って、税金まで使って旅行を推進しているのね。でも、その矛盾さえ人々は大っぴらに声を上げて何も言わないから、それでOKだと思われているのよね」

「ダメだな、こりゃ・・・」

「国や自治体は絶対に国民にとって悪いことはしない、ちよつと矛盾があるかなって思っても、それは自分たちには理解できない深い理由があつてのこと。それも自分たちのためにしてくれていること、という考えが深く沁みついているから何も疑問に思わない。そして、それはおかしいと言いつつ人には、あなたの方が何も分かっていない、あなたの方がおかしいんじゃないですかと言いつつ始末。そりゃもう支配者たちは笑いが止まらないわよね」

「全く、どこまで思考が操作されているんだか」

「おかしいと思うことをおかしいと言えない世の中になってしまっているの。それが一番恐ろしい思考の操作なの」

「何かちよつと前の戦争のときみたいな感じだね。怖いよ」

「そういう風潮を作り出したいの。何も言えない雰囲気ね。ただ支配者たちが創り出す流れに流されていけばいいと思わせておけば、こんなに都合のいいことはないでしょ」

「そうだね」

「そして、次にまた進みはじめた。これは世界各国同じように一斉に始めたの」

「もしかしてワクチン？」

「そう、ウイルスが蔓延しはじめてまだ日も浅いのには、ワクチンができたことがおかしいでしょ」  
 「まだ一年半くらいだよ。そのくらいでワクチンができるなんてあり得ないことだって誰かも言ってた」

「でも、できた、っていうことは、ウイルスと同時に研究していたとしか考えられないわよね。自分でウイルスを作っておいて、そのワクチンも一緒に作っておく。そして、ウイルスが程よく蔓延した頃（本当は蔓延なんてしてないけど、マスコミの情報で蔓延したようになった頃）、ワクチンができたと発表したの。その前からワクチンさえできれば、この騒動は収まる、っていう報道を沢山流していたから、人々はワクチンを待ち望んでいた。ワクチンさえできれば、元の生活に戻るって期待しながら新しい生活様式とやらで我慢していたの。そして、堂々のワクチンの発表に人々は喜んだわ。でもそれも焦らされた。せっかくワクチンができたのに数が足りない、予約もできないということ、もっと早く欲しいと人々は思った。だからワクチンに対して何の疑問も不安も持たなかった。でも、そこにも大きな落とし穴があった」

「また落とし穴？」

「そう、急いで作ったワクチンだからまだ完成していません。治験の状態ですってね。国はとりえず小さな声で治験状態ですって言ったけど、待ち望んでいた人たちはそんなことは聞いていない。とにかくワクチンさえ打てばって思ってしまった。それも国が買い取って無料で打たしてくれるって喜んだのよね。でもね、治験なのよ。まだ完成していないの。そして、無料じゃないのよ。無料で打たせてもらって思ってるけど、それは税金で買ってるの。だから無料じゃないの。」

「ちゃんとお金を払っているの。誰に？」

「製薬会社？」

「そう、税金で製薬会社からワクチンを買ってるの。そしてね、ここがすごい、本当に巧妙よね」「何、何？」

「このワクチンは治験中です。だからどういう副作用があるか分かりません、って最初から製薬会社は言ってるの。だから、もし何か不都合が起きても製薬会社には責任はありません。どんな副作用が起きても製薬会社に賠償責任は問わないでください、っていう契約をさせられているの。そして、言い値で、尚且つ言われた数を買わされた。国が・・・国民が何回も打てるほどの数を買わされた」

「・・・言葉も出ない・・・」

「国のトップも製薬会社には何も言えない。強くは出られない。製薬会社は、世界的にもすごく大きな力を持っているから逆らえないのよ。だから、言いなりに買うしかないの。そして、なにか副作用が出てても文句も言えない。泣き寝入り」

「でも、じゃあ、もし、国の推奨するワクチンを打って何かあったら誰が責任を取ってくれるの？」

「一応国が責任を取りますって言うてるけど、最初のうちは、もし死亡したら四千万円ほどの賠償金を出しますって言うてたけど、そんな言葉だけよね」

「でも実際何かあったら責任は取ってくれるんでしょ？」

「副作用とワクチンに因果関係があったらね」

「うん？ どういうこと？」

「身体に何か起きてても因果関係を認めなければ責任を取る必要はないってこと。もしワクチンを打つてすぐに死亡したとしても、因果関係が認められませんが。ワクチンのせいではありません。何か他に疾患があったのでしよう」と医者に言われてしまえばそれでおしまい。誰も責任は取ってくれないし、もし、打った後に重篤な症状が出て、病院に行つて治療してもらったら、その費用は自分で持ちつてこと。ただでワクチンを打たしてくれたけど、その後何かあったら高額な費用がかかる可能性もあるってこと。そして、その後の人生に誰も責任は取ってくれないというのが事実ね」

「何だよ、それ、メチャクチャ無責任だよな。売ればいいのか？ お金が儲かればいいのか？」

「だから、それが資本主義だつていうこと。資本家はそういう考え方なの。明治維新で資本主義が取り入れられ、江戸時代のような封建制がなくなり自由な社会になつたつて言われているけど、明治維新万歳つてなつてはいるけど、裏を返せば資本主義は資本家だけがいい思いをする社会だつてことよ。労働者からは搾取するだけ。労働者階級の幸せなんて関係ない社会」

「学校では、資本主義は自由でいい社会だつて教わつたけど」

「それは資本家にとつてはとてもない社会だつてことね。競争でのし上がつていけば誰でもお金持ちになれる、社会的にいい立場になれるつて言われるけど、よく考えたらどう？ もちろんピラミッドの途中までは行けるわよ。でもそれ以上は、特別な環境に生まれられない限りムリなの」

「特別な環境ねえ？」

「そう、日本は特にそうね。世襲とコネクション（縁故）が幅を利かせているから」

「世襲とコネか・・・一般庶民には関係ない世界つてことね」

「コネもそうね、ある程度の環境に生まれるからコネもできる。これは世界中同じよね。同じような環境の人たちが結婚したりして関係を深めていく、これがコネクション。政治も経済も感情で動いているの」

「政治は何となく分かるけど、経済も？」

「そう、経済も結局一部の資本家によって動かされているの。株価なんてその人たちが自由に操作しているの。その人たちが情報を握つていて好きに操作することができると。ならばどうする？」

「どうするつて？」

「全く知らない人より、家系的に繋がりがあったり、学友だったり、利害関係で繋がつていたりす

る人と組まない？ その人たちだけで美味しい思いをしようとするのは人情でしょ。だから、トップは繋がっているの。これは世界中同じ。なんか仲悪そうにふるまっても結局は仲間だってこと。だから、また富める者はどんどん富み、搾取される者は、ますます搾取されて貧富の差がどんどん広がっていくっていう仕組みができて上がってる」

「イヤな世界だ。そう言えば国有の土地を友だちにもものすごく安く払い下げた政治家のトップもいたね」

「それが今のあなたたちの社会、ピラミッド社会の実態。資本主義の実態ね」

「でも、今の社会は確かに資本主義でもあるけど、民主主義でもあるよ。民主主義っていうのは民衆が政治などを決められるんだよ。それがあのおかげで国も何とか保っていられるんだよね。世襲やコネで社会が動いているって言うけど、選挙制度というものがあって一般的な庶民も立候補して当選すれば政治家として発言することもできるでしょ」

「だから最初に言ったでしょ。選挙にはお金がかかる。立候補するにも一般市民にはかなり苦しいと思うお金がいる。そして、政治資金もある。そのお金を都合してくれる人が必要になってくる。

理念だけでは戦えない世界なの。支援者が沢山いても組織票には、かなわない。そしてね、民主主義は数なの。数が多い方が力が強い。声が大きくなるの。分かる？」

「そうだよ、だから政党などは、より多くの議員を出したいと思ってるんだよね」

「だから、より多くの議員を出すためには政治資金とコネが必要なの。組織票ね。大企業などや宗

教団体は組織票を持っている。政治理念などは関係なく、その組織に利益をもたらしてくれる人を押す。議員にさせる。そして、都合のいい法案を通させようとする。議員になった人も結局その人たちの方を向いて政治をすることになる。コネを使えばコネが足かせ手かせになる。自由に発言することはできないのが実情。政治ってそんなものよ。民主主義って言っても結局は数が多い方の意見を通すだけ、少数派は黙って従っているって言われるだけ。全く平等じゃない」

「選挙は？」

「選挙ねえ、ま、形だけの民主主義には必要よね。選挙に行くことで、投票することで、自分たち庶民が議員を選び国を動かしているって思わせるためには必要よね」

「選挙もカモフラージュってこと？」

「選挙で自分たちで選んでいるって思えば、自分が押した人が当選しなくて、他の人が当選して自分が思っていることと違う政策をされても仕方がないって諦めて、それに従わなきゃって思うでしょ。文句を言ったら、ならば自分が立候補して当選して議員になればいい、そうなってから文句を言いなさいよ、って豪語した議員もいたわよね」

「マジか、そんな議員もいたのか」

「議員という立場になってから文句を言いなさいよ……っていうのは本音ね。そして負けた人は黙って従いなさいと言われても何も言えない。これが選挙。そして」

「まだあるの？」

「選挙には選択肢がない」

「選択肢はあるよね、何人も立候補してその中から選ぶんだから」

「それよ、そこが自分で選んでいて思ってしまうところ。落とし穴よね」

「またまた落とし穴・・・落とし穴って一体いくつあるんだよ」

「選択肢・・・これって学校制度の話の中でもしたけど、提示された中だけで選びなさいってことよね。立候補した人の中から選びなさいっていうことは、そんなにその人がいいって思わなくても、この人は他の人よりまだマシかな、っていう程度で選んでるだけじゃない？」

「そうだよ、ほとんどその人のこと知らないし、選挙のときの短時間だけの話を聞いたたりして、最後は仕方なく消去法で決める人が多いんじゃないかな。この人はまだマシな気がするってね。酷いときは顔で決める的な？ そう言えば、この人かっこいいからこの人に入れたって言ってたおば様もいたよ。政策なんて聞いても分からないし、顔よねって言った。それ聞いて笑っちゃったけど、ホントは笑ってる場合じゃないよね」

「だから、大きな政党は有名人ばかり立候補させるでしょ。スポーツ選手とかアイドルとか、今まで政治に関心があったかどうかなんて関係なく、ちよつと有名になったら政党からお誘いが来て立候補するわよね。いかに名前と顔が売れているか、人々にいい印象があるかどうかで決まるってこと。一時的にすごいブームを作って注目させるっていう手も使うし。選挙なんてその程度なのよ。その人たちは当選させてくれた政党の命令で動くわよね。ま、マリオネットよ。だから政党にした

ら誰が当選しても同じなの。所詮はお人形さんなんだから。そして、もしその人が自分で考えて行動するようになって、政党に歯向かうようになってしまったら、すぐに首を切ればいいんだから。すぐに首を切られることを知っているから誰も歯向かうことはしない。だから、結局、沢山議員はいつでも最終的には、中心の一部の世襲の力のある数人で国を動かすことになるのよ。そして、選挙のときの公約なんて、当選して議員バッチをつけてしまえばこっちのもの。公約を反故にするなんて当たり前のことになってる。だから選挙なんて何の意味もないってこと」

「でも、みんな選挙に行こう、選挙に行くことが国を変えることだからって、いろんな人がアピールしてるよ。この前の選挙では、すごい役者たちが自分たちで動画を撮って流していた。それを見たら、やっぱり選挙に行った方がいいのかなって思う人も出てくるよね」

「もうね、この時点でおかしいと思わない？ そんなすごい役者たちが皆同じ意見で集まるっていうのも無理があるわよね。なら誰が裏で動いている？」

「国民に選挙に行かせたい人たち？ 選挙で国を変えようとしている人たち？」

「国のトップは、国民に選挙に行かせたいのよ」



「そこが分からないんだけど、選挙に人が行かない方が組織票で当選しやすいでしょ」

「人が行かなくて組織票ばかりで決まったらバレバレになるじゃない。自分たちで数字を動かしたこともバレバレになるでしょ。だから沢山の人に選挙に行ってもらって、バレないように数を操作した方がごまかせるよね。木を隠したかったら森の中ってことよ。そして、皆で選挙に行きましようと呼びかけたのに行かない人たちが沢山いたと吹聴すれば、行かなかった人たちのせいにもできる。選挙に行かない人が政治に文句を言う資格はないと言っこともできるし、行った人と行かなかった人で、また争わせることもできるからね」

「ちよつと待ってよ、選挙の数字も勝手に作ってるってこと？」

「そうね、数字はいくらでも操作できるからね。ちよつと調べてみれば分かるわ。投票した人の数と投票用紙の数が違ってたってこともあるし、開票する前に当確が出ることもある。それはどういうことかしら」

「もう、何を信じていいか分からなくなってきたよ。でも、国の政策は議員だけじゃなくて官僚も一緒に作っているよね。というより官僚が作ってるって言った方がいいかな。なら大丈夫じゃないの？ 変なことにはならないよね？」

「官僚も同じ。官僚はもつと自由よね。選挙なんて関係なく、学閥といろいろなコネを使って上の命令を聞いていれば出世できる。そして、国の政策を作っているのは官僚だから、議員の陰に隠れ

て好きに国を動かすことができる。議員は選挙で落とすことも可能だけど、官僚は国民にはどうすることもできないのが実情ね。そして、官僚はエリート。ピラミッドのトップ。この意味分かるでしょ？ 最近よく聞く上級国民って言葉あるよね。庶民とエリートでは法律まで変わってきているの。法律が変わってきているというより、法律を使う人が彼らに有利に判断するって言った方がいいかな。事故を起こしても庶民とエリート国民とは扱いが違うでしょ。はっきりと階級が分かれてきているの。資本家と労働者階級、一般庶民と上級国民。それが現実」

「俺が習った民主主義はどこにある？」

「あなたが習った民主主義って、皆のことは皆で話し合っ決めて、もしくは選挙で皆の代表を選んで皆のための政治をするっていうもの？ それはどこにもないわね。前からないわ。学校で教えられた民主主義は、民主主義風々な。風々であって民主主義ではない。民主主義の社会で庶民に力があると思わせておいた方が権力者には都合がいいからね。学校では権力者たちの都合のいいようにしか教えないの。都合の悪いことは一切教えない。これが学校の勉強」

「六年、三年、三年の十二年間、大学まで行ったらそれ以上の年月、何を勉強してきたんだろう」「本当にさくやは、イヤなことばかり言う。そんなこと知らなくても生きていけるんだからいい

じゃないかって思うかもしれないけど、こういう社会の裏側を知らないで、これから困ることになるの。だから、こんなイヤなことを話しているの。まず、国、政府、国のトップ、リーダーが国民の幸せを考えているっていう幻想を捨てることね」

「国は国民のためにあるのではない・・・なんか悲しいね。何を信じていけばいいんだろう」

「そこよね、その甘い考え・・・国が、国のトップが自分たちを守ってくれる、リーダーをヒーローみたいに思ってるなんて甘い考えを手放さないと、これからもどんどこ酷い扱いを受けることになってしまう。まずは耳も痛いし、イヤな気持ちになると思うけど、この根本を知ることが一番大切な。資本家と労働者、一般庶民と上級国民、それは支配者と被支配者なの。あなたたちは被支配者だということを知らなければ、次に行けないの。自由だと思わされ豊かだと思わされているだけで、実情は自由ではないし、搾取され続けて豊かにもなれない」

「もうやめてくれよ。吐き気までしてきた。これ以上聞きたくないよ」

「それならそれでもいいんだけど、でもね、これ以上縛られるのがイヤだ、自由を奪われ、ただただ搾取される人生はイヤだと思えば、聞いた方がいいと思うわ。彼らはこれからもっと締め付けを強めようとしているから」

「何なんだよ。次は何が起きるっていうの？」

「最初に言ったように、彼らが目指しているのは世界統一政府。彼らといつても国のトップや官僚

のことじゃないわ。世界中の国のトップの、もっと上の世界的大企業のもっと上の本当のトップが目指しているのが世界統一政府。その存在から見たら、今世界中で自分は支配者階級だと思っている人たちも被支配者階級に過ぎない。ま、言ってみれば奴隷頭みたいなもの。その人たちも命令に背けないほどの究極の支配者」

「レプティリアン？」

「そう、彼らが初めてテラに作った大きな一つのピラミッド社会であるアトランティスのような完璧な支配体系」

「でも、もうすでにレプティリアンは、このテラの人たちを完璧に支配しているじゃない。今更一つのピラミッドにしなくてもいいんじゃない？」

「それが問題なのよ」

「だから、何が問題なの？」

「最初に言ったでしょ、テラの波動が変わって軽くなってきた。それに共振して人々の波動も軽くなるうとしているって。だから、まだそんなに軽くないうちに、もう一度人々を彼らの作った重い波動の檻に閉じ込めようとしているって」

「そこか・・・」

「どうしても人間の重い波動が欲しいの、だから逃がしたくない」

「で、次に何を仕掛けようとしているの？ 今はワクチンまでだよね」

「その次は、ワクチンパスポート。もう始まっているでしょ」

「それか、やっぱり。ワクチンパスポートで、すべての人を管理しようとしているってこと？」

「ワクチンそのものに関してはまだいろいろ話したいことがあるんだけど、その前にワクチンパスポートについて話をすると、これは選別ね」

「選別？」

「そう、まず反抗する人間を選別するの。そして、ワクチンを打たない人、彼らに従わない人をあぶり出す。あぶり出して生活できないように締め付けていく。パスポートがないと公共の乗り物にも乗れない、買い物もできない、外にも出ることができない。そして、もっと反抗すれば逮捕できるようにする。逮捕するときは、沢山の人がいる前で派手に痛めつける。最終的に彼らを服従せざるを得ない状態にまで締め付ける。反抗する気持ちを折る。反抗すれば、こんなに酷い目に遭うんだということを他の人たちにも見せつけるの。そして、人々の気持ちも折る。それがまず一番の目的。そして、次には、もちろん人々の個人情報管理する目的もあるわ。でもとにかくパスポートを使うことで人々に恐怖を与え、彼らに従っていれば安全だと思わせることができる。反抗分子を排除することもできる」

「日本ではまだムリだけど外国の情報を見ているとすごいよ。完全に差別が起きている。柵があって、こちらはパスポートを持った人、こちらは持たない人って分けられ、持っていないなければカフェにも入れないし買い物もできない国もある、先進国って言われる国だよ。俺も憧れて一度行ってみたいと思ってたのにびっくりだよ。民主主義で自由で、とても素晴らしい国だって言われていたのにホントに酷いことになってる。実際にそれらの国で暮らす人の話も聞いたし、その人たちが配信する動画も見たけど、マスクをしないだけで逮捕されたり、酷いときには、警察官にこん棒で殴られたりするんだ。日本ではまだそんな酷いことはできないからまだマシだなんて思うけど、他人事ながらホントに怖いね」

「日本ではできない・・・今はね・・・だから、日本のトップたちは何をしようとしている？」

「改憲？」

「そう、憲法があつてできないなら憲法を変えればいいってね。憲法が変われば、人権よりも国の方が優先されることになる。つまり、外国と同じことができるってこと。戦時中を考えてみれば分かるわ。あの頃は人権なんてなかったでしょ。赤紙一枚で有無を言わず戦地に送られ、死んでもお国のためにご苦労、お国のため、大切な国民のために立派に死んでくれてありがとう、なんて言葉で済まされた。権力者にとって人の命なんてどうでもいいってことがよく分かるでさよ。そして、戦後になって申し訳程度に一部の幹部だけが責任を取らされ処分されたけど、本当の責任者は上手く逃げて、その後も政界などでまだ権力の座にいる。その頃、戦争に反対した人や、ちょっとしたでも批判的なことを言った人は、すぐに逮捕されて酷い目に遭わされた。理由なんて要らないの、気に入らないという理由だけでも引っ張っていくことができた。裁判などしなくても、その場の警

察官などが判断すれば、どんな暴力を使ってもいいとされた。まるで人権なんてない時代。それに戻そうとしているの。人々が戦後やっとの思いで手に入れた人権をまた取り上げようとしているの」

「マジで怖いよ。ディストピアだよ」

「そう、支配者が目指している世界統一政府、アトランティスの社会はディストピアなの。一切の自由はなく、人権もない世界だってことは知っておいた方がいい。今あなたたちの社会、あなたたちのリーダーが目指しているのは、そういう世界なの。すべて何から何まで決められ自分で自由に選択するなんてこともできない。今のようないんちやない。本も権力者が認めた本だけだから真実なんて知る由もない。反政府的な本や彼らが読ませたくないと思う本は絶版になる。燃やされてしまふ。だから、国民は何も情報がなく、彼らの発表することを信じるしかなくなる。真実は分からなくなり、彼ら権力者を賛美するような本だけを讀まされることになる。歌もそうね。今のよう自由表現することなどできなくて、彼ら支配者を賛美する歌か、気持ちを高揚させる軍歌のような歌ばかり歌わされるわ。芸術もそう、家には権力者の写真が飾られ、毎日その写真に向かって最敬礼しなければいけない。実際、戦時中はそうだったでしょ。そんなのやらなきゃいけないじゃないっと思うかもしれないけど、家の中も監視されているから決められたようにしなければすぐに逮捕されてしまふ。逮捕されたらもつと自由を奪われる生活になるから反抗もできない。今の刑務所なんてまだまだ自由に感じるような生活を強制されるの。家族や知り合いとの会話も全部盗聴されているから滅多なこととも言えない。ずっと監視され続け、いつ逮捕されるか分からず常に緊張を強いられる生活」

「でもさ、今の日本は改憲なんてできないと思うよ」

「どうして？」

「だって、まずウイルスがもう弱毒化してるじゃない。ほとんど重症者もない状況で緊急事態宣言も出てないし出せない。だから無理じゃない？」

「それも手よ。一時的に緊張を緩めてもうこれで終わりだとホッとさせて、また次にもつと締める。これをされるとずっと締め付けられるより苦しくなるのよ。たとえば、ずっと殴られているとするでしょ。ずっと同じ痛みを加えられるとその痛み慣れてくるの。でもね、一度殴るのをやめてちょっと休ませると、次に同じ痛みを加えると同じ痛みでも、ものすごく痛いと感じるの、分かる？ 痛めつけて休ませてまた痛めつける・・・これを繰り返しされると、ものすごくエネルギーが消耗する。エネルギーが消耗するから気力も何もかも失って、殴るのをやめてくれるならもう何でもしますということになってしまふの。何でも受け入れてしまふことになってしまふの。それを狙っているのよ」

「えげつないな」

「そう、彼らはあなたたちを従わせるためには何でもするのよ」

「人間としてどうなのよ。それ」

「だから、価値観が違うって。価値観が違うんだから、どんなにあなたたちの価値観で話をしようとしても通じないのよ。彼らは自分たちはあなたたちと違う人間だと思っっているんだから。そこは理解しておかないと。これが理解できないからまだ甘く考えてしまうの。彼らとあなたたち庶民とは倫理観や道徳観がまるで違うってこと。そしてね、立場が変わると考え方や価値観も変わることとも分かってね。今までは庶民と同じ価値観を持っていたとしても、立場が変わってくると彼らの価値観に感化されてしまうこともある。自分に有利になる(大きなお金を稼げる、有名になれる、ちやほやしてもらえる、命令できる立場になれる)と思つたら、彼らの命令を何の罪悪感もなく受け入れることができるようになる人も出てくるってこと」

「そう言えば、この騒ぎの前は、まともなことを言っていたのに、急に違うことを言いはじめた人も沢山いるよ。なんか悲しいね」

「それも現実。今の現実をしっかりと見ないと、どんどん彼らの思惑通りに流されてしまうわよ。気が付いたら戦時中みたいなの、もしかしたらもつと酷い社会になってしまいかもしれない」

「で、ワクチンのことだけど、どうしてそんなに打たせたいの？ ワクチンパスポートで管理したいだけで、そこまでするとは思えないんだよ」

「ワクチンはね、説明するのはとっても難しいんだけど、まずはチップに持っていきたいの。これもちよつと彼らの方針が変わってね、注射の中にこっそりチップを入れようとしていたんだけど、それはバレたときにまずいと思ったのね。せつかく入れても表向きに使うことができないでしょ。本人が納得して埋め込まないと彼らは使うことができない。だから大っぴらにチップを埋め込むにはどうしたらいいかと考えた。そこでワクチンパスポートをまず作らせて、それが無いと何もできない社会にしておいて、そしてそのパスポートにすべての情報を入れる。パスポートとマイナンバーカードを紐付けようと躍起になっているでしょ。まずはマイナンバーカードで一元化しようと計画したの。あまり上手くいってないけど。マイナンバーカードじゃなくてもいい、とにかく何でもいから口座番号から残高まで、そして、病歴などの健康状態から保険証の番号、収入から払っている税金の額など、何から何まで個人情報を入れ込むの。それから、そんなに重大な個人情報をスマホや紙で持つておくのは危険極まりないから身体に埋め込みましょうって宣伝する。身体に埋め込めば、とても便利ですよって。たとえば、手首にチップを埋め込んでおけば、チップをかざすだけで買い物もスマートに簡単にできるし、財布に現金を入れて持ち運んでいると失くしたり盗まれたりして危ないでしょって勧める。電車に乗るときもピッとかざすだけだから改札でモタモタして人にイヤな顔されることもなくスマートに乗り込むことができるなんて言っただけ。美味しいことばかり言っただけ、どんどん計画を進めようとする。お金に関しては現金が使われるよりもチップで買い物を

してくれる方がいいのよ」

「どうして？」

「お金の流れがすべて分かるから。個人が何をどこでいくらで買ったとか分かるから税金とかを取りはぐれることがない。脱税、節税なんてできないでしょ。そして、個人の生活も全部分かる、買い物ってその人の思考が分かるの。趣味の買い物で趣味が分かるし、本を買えば、どんな本を読んでいるかで思考の傾向も分かる。食べ物の嗜好も分かるし、行動範囲も分かる。個人の何から何まですべて把握することができる」

「ものすごくイヤだね」

「だから、給料も電子マネーで払いましょうなんてことも言いだしてる。キャッシュレス社会って盛んにいうのはこういう魂胆があるからなの。でもね、今のところは日本人たちはあまり電子機器を信用していないから現金を手放さないの。ま、スマホや他の電子機器に疎い人たちも結構いるから他の国のようにキャッシュレス社会にすぐになることはないわ」

「確かに俺もスマホで買い物とか、スマホやパソコンで振り込みとかイヤだな。なんかシステムも複雑でよく分からないし、それに銀行のシステムが停止したとか聞くと、やっぱり現金が安全だなんて思うから、俺はニコニコ現金払いだね。で、さっきさくやさん、まずはチップを入れるのが目的で言ってたよね。その他にもワクチンに目的があるの？」

「ものすごくイヤな話になるわよ、大丈夫？」

「もうここまでできたんだから、聞くとよ。教えてください」

「人間の選別」

「また選別？ 支配者に従う派と従わない派に分けるってこと？ 自分たちに都合の悪い人たちをあぶり出す的な？」

「まあ、そんなところなんだけどね・・・」

「何？ さくやさんにしては歯切れが悪いね。何なの？」

「命の選別ってこと」

「命の選別？ 何それ？ 聞き捨てならないよ」

「彼らが欲しい人を残そうとしているの」

「ちょっと待って、どういうこと？」

「彼らは役に立たない人は要らないの」

「役に立たない人って誰よ」

「働けない人」

「年寄りとか？」

「そう、後は従わない人、身体の弱い人、そして、反対に身体が強過ぎる人も要らない」

「意味が分からない」

「身体が弱い人は要らないの」

「どうして？」

「これから彼らはキャッシュレス社会にしようとしているって言ったでしょ」

「うん」

「それは社会を機械化しようとしているってこと」

「機械化するのに身体が弱い人は要らないってどういうこと？」

「機械化するのにはAIと繋げなきゃいけないでしょ。その作業は身体にもものすごく負担がかかる、だから、弱い人は要らないの」

「機械化するってどういふこと？」

「半分人間で半分が機械、AI。SFで人造人間ってよく題材にされるでしょ、あんな感じ」

「ロボコップとか？」

「そうね。あの映画みたいな感じかな。事故などで身体の機能を失った人の脳だけを生かして機械の身体に入れる」

「古今東西、人造人間の映画やドラマは本当に沢山あるね。機械の身体を探して宇宙に出るっていう有名なアニメもある。でもそれはSFの話、作り話」

「彼らは自己顕示欲が強い。だから、自分たちの計画をちよつとずつ知らせるのよ。これはおとぎ話です、あり得ない話ですなんて形を取りながら自分たちの計画を知らせるの」

「マジか・・・ということは人造人間を本当に作ろうとしているってことなの？」

「人造人間といえば、クローンもそう、遺伝子操作で作る人間もある意味人造人間。それを機械で作ろうとしているってこと」

「身体の弱い人は要らないっていうのはそういうことか」

「正確には身体自体が弱いというよりも、AIに繋げるときに適合しやすいかどうかで。病気がちな人というより、適合しやすいかどうかね。だから、彼らもいろいろ試しているの。ワクチンがそう」

「ワクチンで試すって？」

「何種類かのワクチンを作っているでしょ」

「そうだね、何種類かあるね、でも、それは治験だから、ホントに腹が立つけど治験として実験データを集めているからでしょ？」

「表向きはそうだけど、実は適合する濃度とか適合しやすい個体の情報を集めているの。そして、最初から強い薬を使うと死んじゃう可能性が高いから、そして、すぐに危険だとバレてしまうから、薄い濃度から試していったるの。ほとんど何も入っていない注射と少し入っている注射、そして、ちよつと強めの注射に分けてね。一回目はほとんど何も入っていない注射を多くして皆を安心させる。何も入っていないから身体に異常は出ない、副作用は出ない。副作用なんて言葉を使ってるけど、人間にとつて毒を入れてるんだから熱も出るし、痛みも出るし、アレルギー反応も起こる。この注射で何かを予防しようとか重症化を防ごうとかしているわけじゃないから副作用という言葉はおかしいのよね。副作用じゃなくてもう薬害よね。薬害が出るのは想定済み。だから、最初は安心させるためにほとんど何も入れなかった。そして二回目に濃度を濃くしたの。一回目に何も反応が出なかった人は安心して打つてしょ。初めの頃は一回目と違う会社のワクチンは打たないでくださいって言ってたけど、彼らの欲しいデータがなかなか集まらなかったから、今度は別の会社のワクチンでも大丈夫ですとか、交互接種でも大丈夫ですとか言い出した。それはいろんなデータが欲しいから。そして、最初は二回打てばいい、もうウイルスには感染しません、うつすこともありませんって言ったのに、どんどん話が変わっていった、三回打たなきゃダメ、四回打たなきゃダメ、そして、効果が九ヶ月しか持ちません、いや六ヶ月です。三ヶ月になりましたとか言って、何回も

何回も打たなきゃいけない雰囲気になってきた。ここには製薬会社の意図も入ってるけど。何回も継続的に打ってくれば膨大な利益を得ることができるからね。世界中の人たちが継続的に打ってくれば笑いは止まらないわ。黙っていても儲かるんだから。打っても効果が続かない、打たなければせつかく打った効果も無効になってしまう、感染力の強い（これがミソなんだけど、感染力が強いというだけで具体的な症状や死亡率とか重症化率の話はしない）ウイルスに抵抗できなくなりまして言えば、人々はせつかく打ったワクチンの効力がなくなるのはイヤだと思つて素直に何回も打ってくれるでしょ。製薬会社の意図は簡単に分かるわよね」

「製薬会社の儲けだけで、何回も打たせようとしているのかと思つてた」

「それに加えて、実験ね。回を進めるたびに濃度を濃くしていくの。薄い濃度から身体を慣らしていった濃度を濃くしていくことで適合できる人はできるし、できない人は症状が出てしまう。酷い人は死んでしまうことになる。こうして適合できる人とできない人を選別しているの。だから回を追うことに副作用が出て困っている人が増えていく」

「でも、身体の強い人も要らないって言つてなかった？」

「身体の強い人、体力のある人は扱いにくいでしょ。暴れられたら面倒だから。自分をしっかりと持っている人も要らない。反抗しやすいから。だから、初めから濃度の濃い注射を打ったりするの」



「要らないって思われたらえらい目に遭うってことか・・・」

「適合しない人もね」

「人間の身体は弱いから、人造人間にした方が労働力としては使えるでしょ」

「じゃあ最初から生身の人間を創らずに機械みたいな種族を作ればよかったじゃない、レプティリアンはテクノロジーを持っていくんだから」

「彼らはどちらかという機械を作るよりも遺伝子操作の方が得意だったの。だから、遺伝子操作で人間を創り出した。機械は最初からデザインしなきゃいけないけど、人間にはもともと原材料があるから」

「原材料って・・・猿人のこと？」

「自分たちのDNAもあるから、彼らにとつては遺伝子組み換えの方が楽だったってこと」

「で、今頃になって人造人間を作ろうと考えたわけだ」

「人間のテクノロジーもある程度発達してきたから、できると思っただんじゃない？ 今までももつと強い人間を作ろうとして何度も実験してただけど、なかなか上手くいかなかったみたい。だから、遺伝子操作だけじゃなくて機械とか人工知能などと合体させようと思っただけみたい」

「みたい・・・って？」

「これは私の推測だから。だって、彼らが私に計画を教えてくださいたくないじゃない。あの人たちがやるうとしていることは大体のことは察しがつくけど、さすがに細かいところまではねえ」

「そりゃそうだわ、全部教えてくれるわけじゃないか。全部知ってるってことは、さくやさんも仲間ってことになっちゃうもんね」

「人間と同じよ。同じくらいのテクノロジーを持ってて、どんな考え方をしているかっていうところから推測するしかない。でも今までの推測は大体当たってたけどね。彼らも案外単純だから」

「何か面白いね、宇宙人もそんなことをしたり、考えたりしてるんだ」

「そうよ、何から何まで分かるわけじゃない。ただあなたたちより知っていることが多くて、視点が違うだけ。それを伝えているだけ」

「そっか。で、彼らは今度は人間を機械にしようなんて大それたことを考えているってことね。でも、機械化してAIに繋げるってどうやるの？」

「今ももうすでに公表していることがあるでしょ？」

「すでに公表していること？ え？もしかしたらムーンショットとか言ってるやつ？」

「それね」

「俺さ、内閣府が出しているムーンショット目標とかいうの見たんだけど、全く何を言っているかさっぱり分からなかったんだよね。二〇五〇年までに、人が身体、脳、空間、時間の制約から解放された社会を実現・・・なんて書いてたけど、何がしたいのか分からない。人間が身体や脳、空間や時間の制約から解放されたらどうなるの？何が残るの？」

「だから機械人間、人造人間、ロボットにしたいってこと。それを読んでさっぱり分からないのは、書いている人自体が、さっぱり分かってないから」

「書いている人もさっぱり分かってないの？」

「そう、ただそんな感じっていうことを書いておけばいいって言われて書いただけ。詳しいことは知らなくていいの、反対に知られたら困るのよ。何となくそんな感じの世の中になりますって言うっておけば、誰もそんな計画をしているなんて思わないでしょ。そして、計画が進みはじめて騒ぎ出したら、前から言ってたでしょ、あなたたち何も言わなかったでしょ・・・って言いわけしようとしているだけ。言いわけというよりイメージ作戦ね。こんなに素晴らしい世界になります、未来都市です。重たい身体という制約から抜け出して自由になれるんですよ、重い荷物も軽々運べるし、年も取らないし、病気もしない、何人ものアバターを使えば沢山の経験、遊び、仕事ができますよっていいことばかり言って皆に夢を見させるの。キャッシュレス社会のスマートさを強調するのと一緒。SFの未来都市のようにかっこいいイメージにさせておけば後々楽でしょ。楽なのは支配者だけなんだからね」

「そういうことね、だから、読んでもさっぱり分からなかったのか」

「彼らは究極人間は脳さえあればいいと思ってるの」

「脳だけ？」

「そう、ここが私たちと考え方が大きく違うところで、彼らは物質を重視するの。波動エネルギーのことを知っているんだけど、物質を重んじるのね。だから、そんな社会になってるでしょ。物質を重んじるから競争が起きる。だから争いばかりの世界よね。彼らは波動を重くしたい、それは知ってるよね？」

「うん、波動が軽くなると絶対無限の存在に近づいてしまって、自分の存在が消えてしまうと思ってる。だから波動を重くして絶対無限の存在から離れようとしているって」

「そう、精神的な繋がりにより物質的な物を重視するの。だから、人間には脳があればいいと思ってる。遺伝子操作のとき、あなたたち人間の五感の他の感覚をどうして切ったか話したでしょ？」

「超感覚を切った話？聞いたよ。五感だけ残して超感覚を切ったのは、情報を入れないためでしょ。五感より外の情報が入ってきたら直感や閃きで真実を知られてしまうから。それに超感覚を持ってしまったら、他の宇宙人とテレパシーで話をして彼らの計画を知られてしまうから・・・だったっけ？」

「まあ、そんな感じね。超感覚、肌感覚って、言葉にできないけどあるでしょ。そして、頭で考え

でも分からないことが分かったりするでしょ。それって彼らにとつては、とても不都合なの。頭だけだと彼らが教えたことしか分からない、彼らの刷り込んだ情報だけで考える。だから彼らにとつて不都合なことは起きない。でも感覚は違う。だから感覚を切ったの」

「で、それと脳と何か関係があるの？」

「脳は感覚とはあまり繋がっていないの」

「ん？ どういうこと？」

「恋をしたとき、どこがキュンってなる？」

「突然、何？ キュン？ 胸だよ、恋をしたときは、胸がキュンってなるよね」

「脳がキュンってしたって言わないでしょ」

「脳がキュンって、なんか想像したただけでおかしいよ。胸キュンってかわいい響きだけど、脳キュンって言葉はちよつと気持ち悪い」

「でしょ、キュンってするって感覚じゃない？ 何が起きたのかよく分からないけど、なんかキュンってするでしょ、それに何か胸騒ぎがするっていう言葉も使うわよね。なんかイヤな予感がするときも脳じゃなくて胸でしょ」

「だね。脳騒ぎがするとは言わないね」

「だけど、胸っていつでも心臓じゃないよね、心臓がキュンってするとは言わないでしょ。心臓が騒ぐとも言わない。それは胸ってというのが感覚だから。感覚を感じるのが、胸なの。」

「チャクラと言う人もいるけど、非物質的な場所、場所って言う言葉もちよつと違うんだけど、脳み

たいに物質的な物じゃない。だから、それが彼らには邪魔なの。感覚が邪魔なの。だから、脳ばかりを重視させるの。脳さえあれば人間として生きていける、脳が身体のすべてを動かしているって教えるの。だから最後に脳さえあればいいって話になるわけ」

「脳だけ残してあとは機械でもいいって発想になるってこと？ じゃあ、人工知能AIでもいいじゃない。今の人工知能は人間の脳を超えろとか言われてるし・・・」

「それがそう簡単にはいかないのよ」

「どうして？」

「人工知能の計算や処理の機能は人間を超えるかもしれない。きつと人間以上に作れる。でも、彼らが欲していることで、できないことがあるのよ」

「何それ？」

「創造」

「創造？」

「そう、人工知能は処理能力はすごく高いし、学習能力もあつて情報を与えることで沢山のことができるようになる。だけど、何も無いところから作り出すことができない。人間みたいに創造力がないの。すでにあるものに対してはいいんだけど、ないものから創造することができない」

「だから、人間の脳が必要ってことになるのか」

「まあ、脳に関しては彼らも痛し痒しのジレンマは抱えてるんだけど」

「ジレンマ?」

「そう、脳だけで彼らの欲しい創造力はあまり期待できないのよ」  
「え? どうして?」

「彼らは超感覚を嫌う。でもね、ある程度の超感覚がなければ、創造もできないというジレンマ」  
「ある程度の超感覚?」

「そう、創造って何もないところから創り出すことよね。何もないところから創るには、閃きとか直感が必要になる。それは脳だけでは受け取るのが難しいの。できないことはないんだけど、でもやっぱり超感覚に頼る部分が大いなの。AIよりは創造力はあるけど、超感覚にはかなわない。こんな物を作りたいって思うときって知らないうちに超感覚を使っているの。どうやって作ればいいのかって思うとき、それも今までないような物を作りだそうとしているときは頭の外の情報を探っているの。それが見つかったときに閃きとか直感として受け取るのよ。だから、脳だけじゃその感覚は出てこない」

「人間に超感覚は持って欲しくない、でも、AIだけだと彼らの欲しい機械はできない。」

「そりゃジレンマだね。ただ単に労働力だけが欲しいわけじゃないんだ。単純労働以上の労働もさせたいってことか」

「そして、彼らは感情のエネルギーも欲しい、特に重い感情ね。脳だけではあまり感情は動かないんだけど、でもAIよりは感情のエネルギーは出る。でも彼らが欲しいほどは出ない。だから人間も必要なのよ」

「人間もって? 脳だけじゃなくて? 人造人間だけじゃなくて普通の生身の人間も置いておくってこと?」

「そうね、すべてを人造人間にしようとしているわけじゃないみたい。人造人間と生身の人間の割合はまだ決められないと思うわよ、まだどれだけの人が機械化に適合するか分からないから。そして、どのくらいの感情のエネルギーが出るかも実験中だし。ただ、生身の人間っていつでも遺伝子操作するはずよ。遺伝子操作した人間。ま、人間は最初から遺伝子操作で作られたから、今度はちょっとしたマイナーチェンジくらいかな」

「マイナーチェンジってイヤな感じ」

「何がしたくて遺伝子操作するのかはつきりと分からないけど、たぶん私の予測では、また感覚を切るんじゃないかなって思う。生命力って強くて切られても繋がることもある。ムーの頃の子たちみたいに切られた超感覚が繋がって生まれてくる子が増えてきた。だから、また遺伝子操作で超感覚を切るつもりじゃないかな」

「そういうことね。人造人間と超感覚を失くした人々の社会。彼らは何が楽しいんだろう?」

「愛のない世界が好きなの。彼らはコントロールすることが楽しいの」

「人間をコントロールすることで楽しくなるの?」

「まあ主に人間なんだけど、彼らは何かから何までコントロールしたがるの。テラまでコントロールしようとしているわ。テラの循環を止めたり、勝手に別の所に循環を作ってしまったりするからテラの環境も変わってしまう。自然も他の動物たち、植物たちも全部自分のコントロール下に置きたいの。自分たちの都合で勝手に変えていってもいいと思ってるのよ。相手に対する尊重とか尊敬とか感謝の気持ちが少ない。まあ、そんな相手に対する尊敬や感謝の気持ちを持ってしまったら自分も軽くなってしまうから絶対にそんなものは要らない。自分以外の存在をコントロールできて快感を感じるの。征服の快感」

「征服の快感？」

「自分以外の存在をコントロール、服従させることで、エネルギーを補充することができる。あなたたちもやってない？」

「コントロールねえ、なんだろ？」

「パワハラ、セクハラ、モラハラ、カスハラなど沢山、ハラ（ハラスメント）のつく言葉があるでしょ。あれも強い立場を利用して意地悪をしてエネルギーを補充する方法よね。自分はあるより立場が強いんだから言うことを聞きなさい、命令を聞きなさい、自分にひれ伏しなさいってことよ。それって支配・コントロールよね。そして、動物にもやってない？」

「動物にも？」

「特にペットと呼ばれる子たちに、お手、お座り、待て……って命令してるでしょ？」

「そう言えば……」

「それって自分の命令を聞かせる喜びよね。自分の思い通りに相手を動かす喜び。相手をコントロールして楽しんでるってことよ。これが征服の快感」

「そっか、よく分かった、彼らがしていることは特別なことじゃなくて、俺たちも同じようなことをしているって」

「彼らはエネルギーが常に枯渇してるの。彼らは絶対無限の存在から離れようとしているでしょ、ということはエネルギーを補充できないの。だから、誰かからエネルギーを奪って補充するしかない、それも重いエネルギーをね。それで、人間たちを支配・コントロールして、それを補充しようとするの。人間たちはコントロールされると自由を奪われることになるから楽しくない。我慢をしなればいけなくなる、だから重いエネルギーを放出することになる。その重いエネルギーを補充するの。この話は知ってるわよね」

「うん、前に聞いた」

「だから、人間たちが軽くならないように徹底的に管理できる社会を創りたいの。そのための世界統一政府で、そのためのワクチンパスポートからの身体に埋め込むチップ。そして、次には人造人間と遺伝子組み換え人間」

「だから遺伝子組み換えのワクチンなんだ。もうすでに大っぴらに遺伝子組み換えワクチンだって言ってるもんね。そういう計画なんだ。そんなの絶対に阻止しなきゃ。俺はそんな世界絶対にイヤだからね」

「でもこれが今の現実。このままいけばそういう世界になってしまう」

「でも、いつまでもウイルスで引つ張るのはムリがあると思う。特に日本はね。確かにほとんどの人がまだマスクをしているけど、でもほとんど収束している感が大きいんだよ。すぐ感染力のある新しい株が出てきた、な〜ンってまた煽ってるけど、でも一人出ました二人出ましたくらいの勢いで、どうにもこうにも危機感を感じない。最近なんて感染者でも煽れないから濃厚接触者が何人です、だってさ。濃厚接触者の人数数えてどうなるの？ だよ。それにどこからどこまでを濃厚っていうの？ そして、挙句に濃厚接触者とされる人たちは皆ウイルス検査は陰性でしただって。それなのに隔離しますって、そこまでいくと笑っちゃう域だよ。だからもうムリじゃないかな？」

「だから、最終的にはウイルスなんて、もうどうでもいいのよ」

「え？ だってウイルスで煽らなきゃワクチンは打たせられないし、ワクチンを打たせられなきゃチップも埋め込めないし、人造人間も遺伝子組み換え人間もムリだよ。どうするつもりなの？」

「彼らはどんな手でもいいの。最終的に注射を打たせればいいんだから」

「だからどうやって？」

「ここからは日本の話ね。日本に関しては、今度は戦争で煽ればいい」

「戦争？」

「そう、ウイルス騒ぎと同時に何だかきな臭い動きが出てきてない？」

「そう言えば日本の周りの国がきな臭い動きをしているとかってニュースで言った」

「そうでしょ？ 日本は他国から狙われています的な話が出てきていますでしょ。その目的はやっぱり改憲」

「改憲か・・・」

「このままの憲法じゃ他国が攻めてきても軍隊もないし、戦争をしないという規定があるから国防もできない。このままやられっ放しでは酷い目に遭う、だから日本を守るためにはここで憲法を変えるしかない、今度はそっちで煽るのよ」

「憲法を変えないと国防ができない？ やっぱりやられ放題になるの？」

「そんなことはない。だけど、そう言い張るの。反対に憲法を変える方がそういう意味では危険なことがいっぱいあるの。憲法を変えて戦争ができる国になったら、それを理由に他国は攻めてもいいとして大っぴらに攻めてくることができる。そして本当に攻め込もうと思うならば、いくらでも理由を作ることはできる、でしょ？ 他の国でも、いちゃもんつけられて、真相が分からないまま攻め込まれた事案って沢山あるでしょ」

「確かに」

「ちゃんとした理由は全く説明しないで、とにかく攻め込まれたときに困るでしょ、の一点張り」

改憲をしようとしている。世界のトップは皆繋がっている。だから皆で協力して改憲させようとしているの」

「どうしてそんな？」

「日本が邪魔だから」

「日本が邪魔？」

「波動の問題ね。日本列島はムーの波動を受け継いでる。だから、波動が軽くなりやすいの。ずっと言ってるけど彼らは軽い波動が嫌い。だから波動が軽くなりやすい日本を潰したいの」

「マジか？ まだそんな感じなんだ。昔の話じゃないんだね？」

「そう、重くしようと前回の戦争で潰しにかかっても、また復活する。だから、彼らにとって日本はどうしていいか分からない国なの。今回も日本の人たちは世界と違う動きをするでしょ？ 世界の国々のように表立って抗わない。だから力で押さえつけることはできない。そしてあまり煽られない。皆従順にマスクをして従っているように見えるけど、ワクチンパスポートについてはあまり動かない。どうやって煽って動かしたらいいのか分からないって感じになってる。パスポートで締め付けられないとワクチンを打たない人をあぶり出すこともできないし、一元管理することもできない」

「そう言われればマスクはしてるしワクチンも打ってるみたいだけど、パスポートには懐疑的だよ

ね。地方自治体でも独自にパスポートみたいな作ってるけど、ほとんど稼働していないみたいで立ち消えになってる感じがする」

「だから、ここは攻め込まれるという危機感を煽って改憲をしたいのよ。彼らは国防ができる国を創るために憲法を変えたいんじゃない。一番、目の上のたんこぶである国民の人権を取り上げたいの。さつきも言ったけど、国民よりも国の方に権限があるという国にしたいの。今の憲法は国よりも国民の方が上なの。国の主権は国民なの。だからそれを国の方が上にしたいの。国の命令の方が重要だという国にしたいの」

「それって・・・」

「そう、国民は人権を持ってないってこと、国に命令されたら拒否できないってこと」

「戦時中と同じじゃない」

「そう、国民の人権より国の命令の方が上になったら、ウイルスで煽らなくても、チップを強制的に入れさせることもできるし、人造人間にすることもできる。反対する人には警察も暴力を振るうことが許されるし、逮捕監禁することも合法的にできる。国民は抗えなくなる」

「どうにかならないの？ どうやって阻止すればいいの？ じゃあ国民投票をすればいいんじゃない？ 政府も改憲について国民の真の声を聞きたいって言ってるんだから、皆で反対票を入れれば改憲は阻止できる」

「国民投票は彼らの罠」

「罨？ 国民投票が？」

「そう、数なんていくらでも操作できる。選挙を見ていけば分かるでしょ？ 数なんて彼らの都合よく操作できるんだから。そして国民の声をしっかりと聴いたところ改憲に賛成が過半数を上回ったので改憲しますって言うの。そこには国民が望んだことだからという大義名分があるから、大きな顔をして改憲ができるっていうもの。国民投票したら改憲は決まったようなもの。改憲を阻止したかったら国民投票を阻止することね」

「じゃあ、国民の意見を分らせるためには、デモをすればいいんじゃない？」

「デモはダメね。世界の状況をよく見てごらん。デモで変わってる？」

「どうして？」

「彼らはデモをされても何も困らない。反対に喜ぶだけ」

「喜ぶって、だって大勢に反抗されるんだよ、困るよね」

「何も困らないわよ。反抗っていう時点で、もう彼らの支配下にいるってことでしょ」

「反抗が？」

「そう、強い者に対して文句を言っている、もっと言えば、支配者をお願いしているエネルギーになってるってこと」

「お願いしているエネルギー？」

「そうじゃない？ 彼らを自分たちよりも強い、立場が上の存在だと思っっているから、そんなこと

はしないでくださいって皆で抗議するってことでしょ？ お問い合わせね」

「お願いか」

「お願いってことは、お願いでしょ。自分たちではできないからお願いです、話を聞いてください、っていうことでしょ。そんな態度、エネルギーでいくら彼らに盾ついても、彼らは何も怖くない。だって自分たちをまだ権力者として認めているってことだから、権力者としてふるまえるでしょ。いくら盾ついてきても、ハイハイ、分かった分かったっていなされるだけ。現実そうでしょ、いくら政府に陳情しても相手にされないことが多いんじゃない？」

陳情って言葉を使っている時点で、もうエネルギー引きまくっているんだけど」

「確かに、この前もワクチンパスポート反対の署名を何万筆かまとめて役所に持っていった人の動画を見たけど、役所の人は、お預かりいたします、って言っただけで後どうなったか分からない。上の人間が見たのかさえも分からない状態だった」

「だから、そんなものなのよ。団体でいくら訴えてもハイハイって言えばそれでいいと思ってる。庶民はそれ以上できないとふんでるのよ」

「でも、大勢で訴えて政策が頓挫したってこともあるよ、実際」

「それはガス抜き。最初から反対意見が沢山出ることを想定して出しているの。そして、案の定、沢山の反対意見が出ましたから一旦やめますって言えばどう？ 庶民は喜ぶでしょ。」



自分たちの意見が通ったって思ってたってホッとするわよね。それでもう忘れてしまふ。でもね、今度は名前を変えて出してくる。彼らは諦めない。しばらくしてほとぼりが冷めたら別の名前で同じような政策を出してくる。そんな話結構あるでしょ」

「あるね。そう言えば、ある都市で計画されたことに市民が反対して市民投票を行った。そのときに市民の反対票が多くてその計画はなくなった、はずなのに、名前を変えてまたやるうとしていて話聞いたことがある。名前が変わっただけで同じような計画を出してきたのに、今度は皆あまり動かないんだよね」

「もうエネルギーがなくなっちゃったの。一度は勢いでものすごいエネルギーが出る。でも、何度も繰り返されるとそのエネルギーが出なくなってしまうの。もう諦めのムードが漂う。それを彼らは待っているの。彼らは名前を変えればそれで済むと思ってるから。一度や二度市民に反対されても、またやればいいと高を括ってるから何も困らないの」

「何から何まで計算ずくか・・・」

「彼らは決めたことは諦めない。いくら反対されても、手を変え品を変え名前を変え実行する。実行するように命令されているから、実行できなきゃ自分の首が危ない。だから、どんなに矛盾していようと、文句を言われようとやる。そしてね、団体になって抗議してくれると彼らはやりやすいのよ」

「どうして？」

「仲間割れを起こせばいいの。仲間割れを起こさせたら勝手に自滅してくれるから」

「仲間割れを起こさせるって？」

「団体ができてきたら、その中に彼らの手下を潜り込ませるの。最初はその団体の趣旨に賛同しているように見せて、そしてその団体の中心の人に近づき信用させる。そしてだんだんその中心人物の右腕、左腕の立場まで行って力がついてきたら、今度は派閥を作るの。中心人物と自分とどちらを選ぶ？ ってね。そうなると団体は二つに分断され、最初の趣旨とは関係なくお互いで争い合うことになる。そうなるとその団体はもうないも同然になってしまふわよね。活動も上手くいかなくなる。わざと暴動を起こさせることもあるわ。暴動を起こさせて世間にデモをする人たちは恐ろしい人たちだっていうイメージを植え付けるって手も使うときがある。こうして団体を潰していくの。もしくは、その中心人物を懐柔する手もある。美味しい餌をぶら下げる手もあるし、反対に脅す手もある」

「美味しい餌は分かるけど、脅すってどうやって？」

「人には一つや二つ弱点がある。たとえばパートナーや子ども、家族は元気かな？ というひと言でも恐怖よね。家族に何かあったら・・・って思うと矛先は鈍るわ。もしかしたら何か罠にかかってそれで脅されることもある」

「罠？」

「これはよく聞くと思うけど？」

「ハニートラップとか？」

「そうね、その手は結構使われているわ」

「そんな人が、そんな脇の甘いことするかな？」

「彼らの手口はすごく巧妙だから、まさかかって思うことで引っかけたりするのよ」

「マジか、怖いね」

「ハニートラップ以外にもいくらでも方法はある。見たことも触ったこともない物（法律で禁止されている薬物とか）が自分の荷物の中から出てきたり、突然痴漢にされちゃったりね、いくらでも手はあるのよ」

「まさかそんなことまで・・・」

「これは小説とかドラマの世界じゃない、って言うか、本当にあるからドラマにもなるってこと」  
「そんなこと聞かされたら怖くて何もできないじゃない。黙ってたら好き放題される、抗議したらそんな怖い目に遭わされる。もうどうしていいか分からないよ。彼らに抗うことはできないってこと？ このままディストピアになるのを指をくわえて見てるって言うの？ なんか夢も希望もなくなるね」

「同じ土俵で戦おうとするからムリなの。同じ土俵に乗ってしまったら力が強い方が勝つんだから」

「同じ土俵に乗らないって・・・一体どうしたらいいんだよ」